

家庭・保育所・幼稚園

# 幼児の教育

## 2



第七十七卷 第二号 日本幼稚園協会

好評発売中

●日本保育学会創設三十周年記念出版

# 保育学の進歩

日本保育学会編著

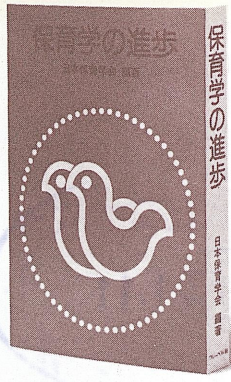
A5判544頁／定価2700円

多数の執筆者による本書は、「保育学論集」の性格をもつとともに、編集方針にそう執筆がなされているため、わが国の保育学の進歩について系統的な知識が概論的に理解できるものとなっている。

また、一つ一つの章(あるいは節)は、各執筆者によるユニークな力作となっており、同時に、執筆者自身の研究はもとより、従来の研究、文献の概況、将来の展望、その他に触れられており、保育学の入門書としても役立つものとなっている。……(本書あとがき)より抜粋

●本書には、次の先生方が執筆されています。

- 山下俊郎・梅根 悟・莊司雅子・岩崎次男・林信二郎・岩田陽子・小川正通・村山貞雄・水野浩志・高野勝夫・渡部 晶・津守 真・城戸幡太郎・児玉 省・千葉康則・黒田美郎・平井信義・浦辺 史・萩原元昭・大戸美也子・本田和子・森 重敏・穴戸健夫・金田利子・島田俊秀・佃 範夫・舟木哲朗・海 卓子・森上史郎・近藤薫樹・牛島義友・大場牧夫・西本 脩・友松諱道・上野辰美・藤田復生・高橋さやか・黒田成子・鈴木信政・日名子太郎・乾 孝・守屋光雄・梶田勲一・岡田正章・小川信子・松村康平 (執筆順)



好評発売中

保育学年報一九七七年版

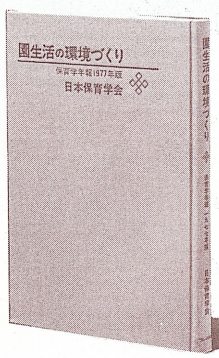
## 園生活の環境づくり

日本保育学会編著

A5判228頁／定価4000円

「園生活の環境づくり」のテーマに公募された七編の論文が掲載されている。そしてさらに、(1)園生活の環境づくりのとらえ方 (2)環境としての保育者と園庭遊具 (3)園生活の環境を生かした保育実践の三つに再編成されている。

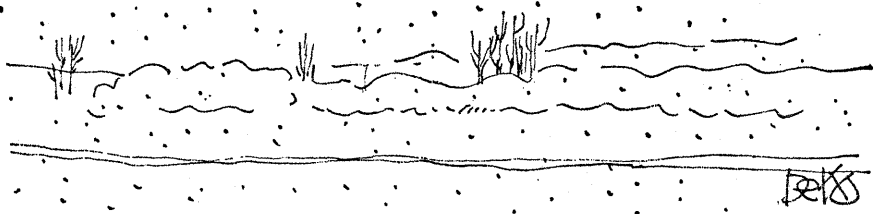
いずれも、園生活の環境をどう捉えたらよいか、という原理面にとどまらず、保育者や遊具が環境という見地から採りあげられており、さらに保育環境を生かした保育の実践が具体的に考えられている。



# 幼児の教育

第七十七卷 第二号





幼児の教育 目次

第七十七卷 二月号

© 1978  
日本幼稚園協会

表紙 梶山俊夫  
カット 中島英子

かいた婦人の村のこと……………	堀内 康人……………(4)
私の幼児教育論……………	三宅 和夫……………(6)
うしろ姿とせなか……………	森田 宗一……………(12)
せなか……………	今泉 吉晴……………(14)
せなか……………	島沢 良子……………(16)
ひとりひとりの子どもを見つめて⑩……………	赤羽美代子……………(18)
私の保育……………	中島佐知子……………(21)



幼児は自然の中で育ち合う

—— 幼児教育に対する両親の意識調査から ——…………… 西本 美節…(26)

映像の中で背中が表現する愛・別れ・孤独…………… 高沢 瑛一…(36)

せなか…………… 豊田 一秀…(38)

せなか —— 親となって思うこと…………… 中村美智子…(40)

おと…………… 村田 修子…(42)

★海外文献紹介…………………………(44)

保育の体験と思案

—— 子どもの世界の探究 ——(十四)…………… 津守 真…(48)

★講演★ 子どもをみて考える

—— 股関節脱臼のことから ——…………… 坂口 亮…(56)

## かいた婦人の村のこと

堀内 康人

知能指数で測ってよければ二〇未満から七〇ぐらいいまでの、不運・不遇・不健康で能力に欠けた婦人を数十名も集め、房総半島の南端で「かいた婦人の村」の施設長をやっておられる深津文雄氏が、『キリスト教保育』の六、七月号に「人間とは何だろうか？ その最低点の記録」をのせている。

私はそれを読んで眠られぬ程の感動をおぼえ、それをプリントして幼児教育に関係のない方々にも読んでもらった。私が真先にお願ひしたいことは、こうした貴重な記録は『キリスト教保育』がひとりじめしないで、どんな幼児教育誌にも転載してほしいということだ。何故そんなことを開口一番申すかといえば、幼児教育にたずさわり、たずさわろうとしている人々に、基本的に考えていただきたいことが、この記録の中で見事に生き生きと描かれているからだ。

彼はこう申しています。「人間この地上に生をうけるかぎ

り、全く無用のものは存在しない(中略)……科学が進歩したのは、よいことですが、そこで発明された合理主義が万能になって、チョットやってダメなものはダメなんだ——という怠慢が支配し、不可能が可能になる悦びがどんどん消えてゆく。これは本当の科学精神ではないのですけれども、どうもこの似非科学が流行してこまるのです」と。

彼は苦難の中でこんな風に考えていきます。「人間はお金という便利なものを発明した、そして何でもお金にかえると幾らと計算することを覚えた。そして、とうとう、お金にかわれ、お金のために働く奴隷になってしまった、お金のためには、なんでもする、お金にならなければならぬ。幼児たちのとき、わたくしの脳裏にフトひらめいたのは、農村にの姿です。わたくしは二十五歳のひとりものとき、農村にはいりこんで塾をひらきやがて幼稚園——戦後は保育所——の園

長をした経験がありますが、せんせい、おはようございます、とやってきて、帽子とかばんを釘にかけると、とんでいって積木の箱をひっくりかえし、止められるまで營々と、つんではこわし、つんではこわしする、あの幼児の労働力―あれをどうして人間は一生もちつづけることができなのでしょう？自由あそびの時間に子どもが展開する、あの意欲的な追究を、なぜ強制的な一斉教育や、おもしろくないお勉強におきかえねばならないのか？……学歴を肩に社会にでると、一生おもしろくもない仕事に、ただ給料のために通いつづける―そうなるために、あの生命にみちた幼児期があるのだとは、どうしても思えなかつたのです」と。

こうして彼は、幼児期に基本的にあるものは、人間全体に基本的にあるものでなければならぬと考え、かにた婦人の村づくりを、苦難と栄光の中で実践しています。このような紹介では、その姿の全貌は浮び上ろう筈がありませんが、是非その記録全体をお読み下さい。

私がこうして深津氏の人間の最低点の記録を読むことをすすめた主意は、幼児教育が合理主義的に人間発達における幼児期の研究をすることだけではなく、もっと深いところで人

間愛の研究であるということをいいながら、その中で近代合理主義批判をしてもらいたかつたからです。

近代合理主義の中で、人間もふくめて生物、その生物学は分子生物学へと発展しておりますが、そうした学問をする人々の間にさえ現在、世界的に一つの大きな思想的変換がくりつつかるといふことです。それはなにかというと、それらの科学が自然科学、とくに生命科学の立場からのみ発言していたにすぎない、それをもっと人間の方に目をむけなければならない、そしてその人間の文化・思想・精神といったものが生物である人間にとって果して適したものであるかどうか。今の社会は自由社会だという、人間にとってそれが歴史的现实だから自然だというが、まさに非人間的であるかも知れない、現在の社会の価値なりなんなりが疑問になって来る、その疑問のある社会で育てられ、人間は日に日に非人間的にされている、その悪循環をどこで絶ち切るか、そんな根本的な問題と、深津氏の人間愛の教育、そして第二世紀を迎えようとしている幼児教育とを関連させながら考えていく必要があるように思われてなりません。

(東京家政大学)

# 私の幼児教育論

三宅和夫

私は幼児教育論を語るに値するような専門家だとは思っておりません。ただ大学を卒業してこれまでの二十数年間発達心理学を研究しながら幼児にふれ、また幼児を通して母親や先生に接する機会が多かったと思います。そこで、そのような幼児とのふれ合いから、私が得た幼児観とでもいったものについて、すこし述べることにはしたいと思います。

幼児を直接に対象とした心理学の研究をするようになったのは、当時北大の教育学部の教授をしておられた城戸幡太郎先生の助手として北大に勤務するようになってからです。改めて申すま

でもなく城戸先生は教育心理学者として有名な方ですが、幼児教育には特に深い関心を持っておられ、独特な幼児教育についての考え方を展開された方です。先生は北大へ来られて間もなく構内に札幌市から払い下げを受けた古電車を三台設置して、近所の子どもたちを対象に保育の試みを始められました。

当時は幼稚園や保育所に通う子どもはごく少なく、遊び場もあまりありませんでした。先生は広大な北大のキャンパスを子どもたちにとって絶好の遊び場と考えられ、その拠点として古電車を置くことを思いつかれたようです。私が赴任したのは、そのような試みが一応軌道に乗ったころでしたが、城戸先生が助手としての私に言いわたされた第一の注文は、子どもたちの面倒を見るといふことでした。これが私が発達心理学、特に幼児の発達の心理



学的研究の道へと進んでいくきっかけになったのです。

ところで城戸先生は広いキャンパスの中で幼児が思う存分活動すること、芝生の上で取組みあったり、木登りしたり、土いじりをしたりすること、冬になれば雪あそびをすることなどを期待しておられたようです。室内遊びの場所として古電車で充分だと考えておられたわけではないにしても、むしろ外で自発的に子どもたちに活動させることこそが大切なことだと思っておられたようです。

このことは私にとっても、全く新鮮な経験でした。子どもたちにとびかかられたり、けとばされたり、ネクタイを引っぱられたり、最初はいささか音をあげましたが、子どもたちの自発性、活動力、創造力を示すいろいろな事例に接することができたのはその後の研究の中で問題を設定するのに大いに役立ったと思うのです。そして子どもの研究は子どもの現実の生活にふれ、そこから問題を発見するのではなくては本物とはいえないということも学ぶことができました。

## 二

教師をしている人にとってはごく当り前の常識だと思えますが、子どもには個性があること、そしてそれには彼らの家庭を中心とした経験が色濃く反映していること、したがって子どもに効果的に働きかけるにあたっては、それらのことをよく考慮することが必要であることなどについても、私は北大での子どもとのかわりの中で学んだのです。当時は、今よりも行動主義的な学習心理学がさかんな時代であり、その影響もあって、幼い子どもはおとなから教えられ、訓練され、しつけられる存在、つまり外から与えられる刺激に受動的に反応する存在とみる傾向が強かったように思います。私も知らず知らずに、そのような子どもに対する見方をしていたのかもしれないが、それを改めるうえで、子どもたちにかかわったこと、そしてお母さんたちからいろいろと学んだことが大きかったと思います。

こうして幼少期の経験が後の発達にどのように反映するのかというような問題に私の興味は向かっていきました。そこで私がそのころ行なった研究の一つについて簡単に紹介してみることになります。さきに述べましたように私は子どもが自発的にやりたいことを思いきりやるということは、自分の環境へ及ぼす力を認め、また自分のまわりの環境についての認識が深められることになると考えていましたし、実際幼児のころにそうであった子どもが小

学校へ入ってからよく学校生活にも適応し成績もよいという例をいくつか見てもいました。

そこで北大で幼児期を過ごした子どもを小学校入学後できるだけ長く追跡的にしらべてみることにしました。もともと一〇〇人ほどの子どもを毎年くりかえしてしらべるのはなかなか大変で、完全に収集できたのは毎年個別に知能検査を行なって得られた知能指数(IQ)だけでした。私が注目したのは数年の間にIQの上昇する子どもと、IQが下降する子どもでした。まず彼らの入学前後における行動の特徴との関連を検討してみたところ、IQ上昇群の子どもは下降群の子どもより自主性や達成動機(高い目標の達成にむかって努力しそれに成功しようとする願望)がすぐれているということが分かりました。つまり幼いころに自主性や自発性があり、がんばって物事をやりとげようとする意欲のある子どもに、次第に知的な水準が高くなり、反対にそのような特徴を幼少期に欠いている子どもの知的水準は次第に下るということなのです。

ところで、このように重要な子どもの自主性や達成動機というもののはどのようにして形成されてきたものなのかということが私の知りたいことでした。私はこの子どもたちの母親から自立や達成について、どのような期待を子どもに対してしており、またど

んな働きかけをしているのかについての情報を集めました。具体的に申しますと「仲間の言いなりになるよりも自分の考えをはっきりと主張する」、「少々つらくても助けを求めず、独力でがんばる」などいろいろの項目について母親が自分の子どもに対して何歳ぐらいからしつけをすることを必要と考えているかなどのことをしらべたのです。

結果は、このような子どもに対しての期待やしつけを早期にすることと子どもの自主性や達成動機の発達とはっきりとした関係があることが明らかになりました。このことをさきのIQの変化についての結果とあわせて述べますと、母親の子どもの自立や達成についての期待やしつけが早期になされた方が、子どもの自主性や達成動機の発達を促進し、そのことは子どもの知的発達にもよい結果をもたらすということになります。この研究は今ふりかえってみると、方法的にいろいろ問題がありますが、その後の私の研究の出発点としては意味のあるものでした。とにかく幼少期に母親はじめまわりの大人があまり干渉したり、行動を制限したりしないで、子どもが自発的、自立的に環境にかかわる自由を認めてやるのが大切だという私の考えはさらに強くなりました。

さきの研究においてもそうでしたが、どのような幼児がのぞましいのかということ、その子どもが後にどのような発達をとげるかということと無関係に考えるわけにはいかないのです。そして、そのような問題を扱う場合には、同一の子どもを長期間にわたって研究の対象として考察しなければなりません。これがいわゆる縦断的研究といわれるものです。私はそのような研究が日本にはほとんどないのでぜひやってみたいと考えました。そして、そうすることによって幼児期にどんな経験をすることが大切なのかを明らかにしたかったです。

この研究では母子関係ということに焦点をあててみることにし、はじめて妊娠した人たち五十名を対象として選り研究を始めました。現在この人たちの子どもは十歳前後になっていますが、そのうち二十三組の母子については、これからも継続して研究が行なえそうです。私は、子どもの乳児期、幼児期、学童期と、くりかえして観察、面接、検査などを行ない、母子関係や子どもの行動特徴についての資料を集め分析検討してきました。これまでに分かったことで、さきの研究の結果とも関連させてみると興味

深いことは、子どもが九歳近くになったときに把握られた行動特徴と乳幼児期からの母親の子どもへのかわり方との間に関係があるということです。

具体的に申しますと、子どもに押しつけ的にかかわらないで、できるだけ子どもの自発的行動を促し、子どもから母親への働きかけによく受け応えてそれを発展させるように配慮する母親の子どもは、学童期に獨創性、好奇心、応答性、自己充足性などが目立ち、IQも他の子どもたちより高いということが分かりました。また、これとは逆に子どもに押しつけ的に働きかけ、子どもの欲求にあまり配慮することなく一方的に指示したり統制することが多い母親の子どもは、さきの子どもたちにあったような特徴が目立たず、IQも他の子どもたちよりも低いということも明らかになりました。この研究では母子が相互交渉するような場面を設定して細かくその様相を把握したわけで、しかもそれを入学まではすくなくとも一年一回、その後もできるだけくりかえして行なっていていくわけで、前のIQの変化についての研究とくらべれば、かなり子どもの発達にかかわる条件を具体的に検討できたと思います。

今までの分析から得られたことを一応の結論として述べてみますと、母親が子どもの行動や要求によく配慮して的確に働きかけ

たり応答してやること、ならびに一方的圧力的にかかわらないこととの二つが子どもの行動の発達にとって望ましいということになります。このことは母親だけではなく、父親さらに先生にも当てはまるのではないかと思いますが、そのことをこれからの研究でたしかめてみたいと考えています。

#### 四

ところで、世界中どこへ行っても子どもは子どもであり、子どもにとって望ましい環境とか母親の働きかけも共通であるように思われるかもしれませんが、でも考えてみれば、社会が違えば、文化や生活様式が異なり、子どもが生まれたときから育つ環境もそれぞれに違っているわけですから、ある社会で望ましいしつけの仕方が別の社会でもそうであるとは限らないのではないのでしょうか。

私は二十年ほど前に一年半にわたってユネスコの仕事で東南アジアに行っておりました。そして、子どもの、家庭や学校での生活についていろいろと調べたことがあります。日本の子どもについて当てはまるのが、全然当てはまらなかったり、親のしつけや育児の仕方が非常に異なることを知っておどろいたものでし

た。そして子どもは、その置かれている環境と相互交渉をしているのであり、子どもの発達を考えると、その特定の社会的文化的環境との関係で扱う必要があるのだということを改めて認識しました。そうであれば他の国で望ましいと考えられているしつけや教育の方法が、日本においても効果的だというわけにはいかないわけで、外国直輸入ではいけないことになります。また同じ日本の中でも地域的にはこの点について違いがあるはずです。

こうした問題について、私はいくつかの研究を行ってきました。そのうちの一つは、日本の幼児と母親の関係とアメリカの幼児と母親の関係についての比較研究です。これは日米双方の数名ずつの研究者の共同プロジェクトの一部で、私も北大関係の者が担当したものです。私どもは四歳の幼児と母親を対象として、母親にひとつの遊具をわたし、子どもと自由に遊ぶように指示して、母子の相互関係を観察しました。遊具は、六十四個の穴のあいた板と、そこにさし込むことのできる赤、黄、青、緑のたくさんの小さい円柱からなっており、これらの円柱でいろいろな模様などをつくることができます。

母親によっては子どもに直接的に指示することの多い人もあり、また子どもに自由にやらせて見守る人もありました。私どもは日米それぞれの母子についての観察の結果を細かく分析して、

言語的交渉を中心に行っていると検討しました。これとは別にこのプロジェクトでは子どもたちの知的発達について五歳、六歳のときを中心に行っているのテストなどで資料が集められていました。

これら母子関係、ならびに子どもの知的発達の資料についての統計的処理の結果、日米の間にはつぎのような異なる傾向があることがわかったのです。すなわち、日本で幼児の知的発達を促進する母親の働きかけとしては、子どもによく受け応えてやりながら、子どもの行動が展開するようにする配慮的なかかわりで一方的指示的に圧力をかけないかかわりというものが浮かんできました。これは前の縦断的研究の結果と一致しています。

これに対してアメリカにおいては、母親が子どもをリードし直接的に指示することがある一方で、よく子どもの状態に関心を払い配慮するということが子どもの知的発達を促進するということが明らかにになりました。つまりどちらも子どものことをよく配慮するという点が望ましいということでは共通に見えますが、日本ではあまり直接的指示的な働きかけは効果がなく、むしろ間接的指導的なやり方がよいのに対して、アメリカでは直接的指示的な働きかけがよいということなのです。

このような日米間の違いがなぜ存在するのかを解釈するには子どもが生まれてから三、四年間にどのような経験を母子関係を中

心として得てくるのかをくわしく検討しなくてはなりません。他のいくつかの研究を参照しながら考えてみますと、このような違いを生む一つの話は、日本における乳幼児期のしつけが子どもに親に対する依存を求めるものであるのに対して、アメリカにおいては親からの自立を求めるものであるということではないかと思われまふ。そこでアメリカの幼児が自律的自己主張になり、日本の幼児がどちらかと言えば自己抑制的他律的になるのではないのでしょうか。ですからアメリカの幼児は母親から、かなり直接的な強い指示を受けてもそれを自分の自主的判断をする際材料とすることにより積極的に行動することができるようになり、日本の幼児は母親に受け容れられ、承認され、元気づけられることによつてはじめて自律的な行動に向かうのであり、直接指示的に圧力をかけられると自発的に活動できなくなるのではないのでしょうか。

このような結果は子どもの発達にとつてなにか有効かということとは、その子どもの環境との相互作用による経験との関係によつてきまるということを示唆するように思えます。私たちは、幼児に対する時、どんな環境の中にいるのか、どんな経験をしてきているのかということに常に考慮して、どのように働きかけたらよいかを決めていかなくてはならないと思います。(北海道大学)

# うしろ姿とせなか

森田宗一

還暦をふたとせ過ぎてようやく  
かすかに己がうしろ姿見ゆ

これは昨年私の六十二歳の時の述懐である。自分がどんな生きざまをしているか、どのように人に影響を与えているか、その大事なことが、人生の秋になってようやくかすかにわかるものかということ、愚にも寂しいことである。しかしほっとすることもあるように思われる。

私は三十数年非行少年と呼ばれ問題児といわれる少年少女とつき合い診断処方をしてまいったが、まさに「子は親の鏡」であり、「うしろ姿で子は育つ」ものだということを教えられた。そして自分は裁判官としてまた教師のはしくれとして、何よりも人の子の親として、どういううしろ姿を見せて来たのであろうか。ハッとしたりドキンとしたり、時にはホッとしたりの歳月を重ねて来たように、痛感させられるのである。

倉橋惣三先生が、家庭教育の要諦三態として、「ま向き、横顔、うしろ姿」をいつも説かれたことは、あまりに有名である。そして、うしろ姿の力こそ、おそらく真向きで説き、横顔で教えるよりも、さらに深い何かをわが子に与えるものであることを、くりかえし説かれたのである。そのことのまことに真実であることを、私は沢山の实例から学んだ。人生の旅路において、歳月を重ねることに消えることのない思い出となり、心の支柱となるのは、幼い頃からの親や教師のうしろ姿（その生きざま）にほかならないと思うわけである。

その「うしろ姿」のうち最も具体的なのが「背中」ということであろう。幼いころ、おんぶしてもらい、もたれかかった母の背、トントンたたいてあげた父母や祖母の背中、それは年とともに私どもにはなつかしく思い出されるものである。思えば人間の「せなか」ほど人生の歴史が彫り刻まれる

場所はないともいえよう。日本人の古い習慣として西洋人とちがうのは、母が子どもを背におんぶして働き、遠くへ出かけたたりすることである。今は西洋式になって、そういう母子の姿を見ることも少なくなつた。そこには育児法や母子関係の上での問題点も指摘できることだろうが、西欧にないよさと深い意味のあつたことも忘れてはいけないのではないかと思う。むしろ最近欧米の心理学者や教育者の中に、日本人のその習慣のすばらしさを賞讃する人も少なくない。いわゆるスキんシップの意味で評価する人もあるが、もっと深い人生の親と子の関係としてとらえている人もある。

さて、私が知っているケースでこんなのがある。仮りにA子と呼ぼう。A子は頭がよく鋭い子だった。小学上級生の頃から母親と緊張関係がつづきうまくいかなかった。中学に入ってから、一層きびしく、家出したり、すごい反抗の態度をとることも、しばしばだった。

ある日A子は学校から帰ると母の声がかきこえない。いつもガミガミキンキン耳につらくきこえた母の声がない。どうしたのかと思つてそつと母の部屋に入つてみると、母はじつと机に向つて読書しているらしい。何かの本に感動して涙ながらに読んでいるらしい。その後姿を見てハッと心うたれその

ままそつと自分の部屋に来てしまった。その後、いつになく母と一緒に風呂に入ることがあつたという。A子と母親にこつては、珍しいことだった。何か白いものが見える母のうしろ髪と背中を見て、思わず母の背に体をよせ、そして母の体に石けんをつけ洗つてやつた。母はにっこり笑つて気持ちよさそうにA子のするままに背中を洗わせていたという。

そういうことがあつてから、A子と母親との悪い緊張は急速にはぐれ、融和して行つたという。

まさにこの母と子は、うしろ姿と背中での出会いで一切問題は解決したといつてよい。心温まる事実だと思ふ。

始めに短歌で心境をのべたように、己のうしろ姿は、なかなか見えないもの、歳月のかかるものだと思う。同様に自分の背中によく見えないものだと痛感する。しかしそれを人は見て、判断もし影響も上げる。こわいような感さえる。

この文の最後を、何年前か、鳥取の砂丘を見て感動した時の句を以て結びたいと思ふ。

母の背にかも似てまわし春砂丘

(元家裁判事・弁護士)

## せなか

今泉 吉晴

せなかといえは、「おんぶ」という私たち人間独特の子どもの運搬方法が思い起されます。「おんぶ」は、ある程度手を自由に、他の仕事に使えて、しかも子どもを運べ、保護できるのですから、うまい方法だといえるでしょう。何しろ手の使用は、人間が人間であるための一つの基盤であって、それをうばわれては、私たちはほとんど仕事もできないのですから。

実は動物界広しといえども、私たち人間のように、子どもをおんぶできる動物は、ほかに一種類もありません。というところアラヤコモリネズミは背中に子どもをおぶっているではないか、といわれるかもしれませんが、でも、これらの動物では、子どもが母親の背中に自分からしがみついているのであって、母親が積極的に何かをしているというのではないのです。私たち人間だけが背中に子どもをおんぶできる唯一の動物だといえます。

その理由は人間が直立二足歩行をするからだ、といえ

ば、たしかにそれは正しいのですが、もう少し具体的に考えてみると、そこには仲々興味深い秘密がかくされていることがわかります。

まず、おんぶするときの腕のまわし方を見ましよう。肩の関節で、腕は後方に少しひかれ、ひじの関節で前腕が腰のやや上方にそえられます。そして手のひらで赤ちゃんの体が、下方からささえられています。それぞれの関節がいろいろな方向に曲げられ、その結果として手が背中にまわされていることがわかります。実はこのように複雑な腕の回転ができる動物は、サル類の一部をのぞけば、動物界には他に見あたらないのです。例えばイヌやウマを考えてみて下さい。彼らが後足で立てたとして、前足を背中にまわすことができるでしょうか。それはとても無理な相談です。

その理由はいろいろあるのですが、ここではもっとも大きな要因をあげておきましょう。彼らは私たちのように鎖



骨を持っていないからです。鎖骨という骨は、胸部の一番上にあつて、肩甲骨と胸骨とをつないでいる棒状の骨です。私たち人間の腕はこの鎖骨を支点にして、前後方向以外に左右にも上下にも、それこそありとあらゆる方向に動かせるというわけです。ウマやイヌなど、走ることに専門化した四肢を持つ動物では、肢は前後方向に動くことだけで十分で、不必要な鎖骨は退化してしまつたのです。

ところで鎖骨は私たちの背中の特徴もつくつています。人間の背中が広く平らだという特徴です。胸骨から左右に長くのびる鎖骨は広い肩幅をつくり、広くたいらな背中の筋肉（僧帽筋など）が、首から胸の下部までの背椎骨からのびて、この鎖骨と肩甲骨につくのです。この背中の筋肉は肩を動かし、腕に強い力を与えています。そして広い背中は、おんぶの安定した場にもなる、というわけです。

このようにユニークな人間の背中ですが、矛盾もあります。せなかの「無防備性」とでもいえる弱点は、その最たるものでしょう。私たちの目は二つ並んで顔の前面についている上に、背中が広いため、背中是完全な死角になります。背中は敵からの攻撃にもっとも弱い部分といえるでしょう。ちなみにウマなどでは、目が頭の左右にはなれてつ

き、頭部も高い位置にあることから、背中の方にも、その大部分を見ることができません。

ところで背中が無防備であるということ自体は必ずしも弱点になりません。サルたちも人間同様背後を見ることができませんが、群れ生活をおくる彼らは、仲間の目の助けを期待できます。仲間のたくさんの目が協力しあい、どんな動物よりも早く敵の接近を知ることができるのです。問題は私たち人間にとって敵とは何か、というところにあります。

動物にとっての敵は必ず他種の動物——例えばウマにとつてならオオカミやライオンなどの肉食獣——であつて、同種の仲間ではないのです。悲しいことに人間という動物だけは、最大の敵が同じ仲間の人間です。本来助けあい、背後からの敵の接近を知らせてくれるはずの仲間が敵になるのです。そこで、せなかはおもつとも無防備な部分としてねらわれます。私たちは背後からの攻撃はひきょうだ、などといったあまりあてにならない「モラル」を発達させました。人間にとつて人間が敵という最大の矛盾は解決されてはいません。背中はいろいろな意味で、人間の人間的特質を背おつているといえるでしょう。（動物学者）

## せなか

島沢良子

「せなか」とは、胸と腹の後ろ、「背に腹はかえられぬ」という場所である。胸と腹を表とするなら背中は即ち裏側になるわけ。裏とは表の反対側で、後ろ側ということになる。さで自分の「せなか」はどうやら自分で搔くことはできようが、自分の眼で確かめることは不可能の部分である。(たまには8ミリ映画などで自分の後姿を発見し意外感を抱かれた方もあると思う)そのくせ他人様のはよく観察することができる。特に生活のしみ込んだ部分で、粉飾することも言いわけすることもできないままさらけ出して、本人は他人様から遠慮なく眺められていることに気がつかない。「背を向ける」、「背をまるめて」、「肩を落して」、などは明るい言葉ではない。

しかし、子どもたちの「せなか」、これはいつもビチビチとして動きまわっている。私のながつき合ってきた多くの子どもたちには表も裏もない。もちろん、背中に顔はついて

いないのだが、その子の背中を見れば名前はわかる。それほどにこの裏側には個性があり表情がある。子どもたちが肩を組み合っている「せなか」、これは仲よしの相談である。肩を寄せ合って低くなっている時は、蟻ん子の活動を飽かず眺めている時、「せなか」越しに声を掛けたくなるが彼等の経験と感動を大切に、と思いつのまま私の方が、彼等の「せなか」を観察することになる。こんな生命力に溢れている「せなか」、このまま成長して勉強に、仕事に打ち込む後姿であってほしい。そう考える程、彼らの「せなか」から個性と表情とがはつきりと汲み取れるのである。ひらたく見える背中は実はよく動くのである。縦横に凹凸に、丸さの加減の変化は、表側の顔と同様、心の中の感情が出るのは不思議にさえ思われる。

運動会の遊戯について——子どもと父母のお楽しみの日です。四月入園当初はおぼつかなかった足跡りの幼児が、仲

間と共に走り歓声を上げる姿を目前に見て父母も保育者も感動の拍手を惜しまない。さて次は行進曲に合わせて子どもたちは一列に並んで出場してくる。列は次第に弧を描きいつのまにか子どもたちで円陣ができあがる。一同は中心に向かつて立ち、隣同士と手をつなぐ、中心には誰もいない。つまり観客一同へ「せなか」を向けた隊形になったわけ。曲に合わせて、簡単な動作・身振りをする。考えようによっては、自分と失礼な隊形。(運動会は見せるためのものではない、本質的に、などと言ってしまうえばそれだけの話だが)、私は運動会リズムのことを「せなかゆうぎ」と称している。簡単な動きをリズムによくのって踊る、とお母様方は、子どもも「せなか」おどりに感動して涙まで流して下さる。私は後向きを可愛らしく見せる動きを主眼として振り付けに苦心している。これが運動会リズムの秘訣である。次におゆうぎ会の計画が始まり「運動会のあれは好評だったからおゆうぎ会にやりましょう」と若い先生方からの発言に「一寸待ってよ、あれは後向き用に振りつけてあるから」と今度は急遽、舞台の正面に向かうようにと振りつけを変更するわけである。

可愛い子等が本当に私共に「せなか」をむけて行ってしまう時、それは三月にやってくる。私共に背を向けて元気よく

小学校へとジャンプしてゆく姿、保育者の宿命とはいえ、毎年味わわなければならない。喜びの蔭にある淋しさだ。

さて大人の「せなか」子どもから成人に移る時の女の子、肩から首にかけて美しい線を出してゆく。母親に似てるのもこの頃だろう。さあその先がいけない。「せなか」で年齢を感じ始める。フォークダンスのお母様に「膝を伸ばして胸を張って下さい」と一言かけると、一同急にすっきりした姿勢になって、生活の疲れを忘れフォークダンスで若返った一時を過ごすことができる。胸を張ってとは肩甲骨を引き寄せるようにするのである。舞踊や芝居の中で後向きの演技が難かしい。女形が後向きで男性とばれることがあり、後向きで役の感情がにじみ出せたら名優である。舞踊では後向きのことを「うしろつき」と称し、その美しさを表出することは伝承されたいろいろの型で残っている。昔から「せなか」については研究されていたのだと思う。

そろそろ背の丸くなられた方へ一言、人と会話する時、肩を引いて下さい。立ちあがる際、胸腰をつとめて伸ばして下さい。いつまでも若々しく活動家であなければならぬ保育者でありたかったら、是非どうぞ。

(大井うさぎ幼稚園)

# ひとりひとりの子どもを見つめて ⑩



赤羽美代子

ある朝のこと「シェンチェイ（先生）、プーメランを折って」と、三歳児のH夫が、折り紙を一枚持って、私の所に来てきた。不覚にも、私はプーメランとは、テレビに出てくる怪獣の名前かな？ と考えた。

「プーメランって、なあに？」

「あのね、あのね、F夫ちゃんが持つてるあれ！」

指さす方を見ると園庭の真中で、五歳児のF夫が、折り紙で折った手裏剣を（星型）、ヒュッ、ヒュッと飛ばしている。F夫が飛ばす手裏剣は、クルクルと、見事に飛んでいる。いる。

私はH夫に「ああ、手裏剣のことね？」と聞いてみた。

「ううん、違うよ。プーメランだよ」

「あの、お星様みたいな、あれでしょう？」

「違う。お星様じゃないの。プーメランなの」

仕方なく、側を通りかかった五歳児Dに、小さな声で

「プーメランって、空を飛ぶ怪獣の名前？」

Dは「えーっ！」

私は、慌てて「手裏剣の事かな？」

「うん、まあね。先生僕にも、プーメラン折ってよ」

「僕の方が先だもん」と、H夫は憤然と、小さい身体に力を入れて、五歳児のDを押しつける。

「プーメランは、折り紙が二枚いるのよ」と、私は、H

夫にいう。

「うん。シエンチェイ、僕が一番だよ。場所、とっててね」三歳児のH夫は、顔を、きゅうつと前にのぼして、自分では、とっても早く馳けているつもりらしいが、ペタペタと馳けて行った。

H夫が黄色の折り紙を持って帰って来た時には、既に、四・五名の子どもたちが、折り紙を持って、手裏剣作りの順番を待っている。

私は、H夫から折り紙を受けとりながら「今から作るブーメラン（手裏剣）は、魔法の息を掛けますから、よく飛びますよ。チンブイのブイブイブイ！」と、いいながら、フーフーと息を吹き掛けた。

順番を待つ子どもが増えてきたので、できるだけ早めに、H夫の手裏剣を折り上げたいと、私は、せこせこ指を動かした。

「さあ、できましたよ。H夫ちゃんのブーメランは遠くへ、遠くへ、飛んで行きますよ」と、大事そうに、H夫の手のひらに、そっと乗せた。後方で、順番を待っている子どもたちは「あっ、いいな。いいな」と、羨ましそうに、H夫の手裏剣を見守っている。H夫は、長い間、待た

された甲斐があったのか、ニコニコと笑いながら折り上がったばかりの手裏剣を眺めている。

だが、H夫は、急に「これ、Dちゃんにあげる！」といつて、すぐ後ろに立っているDに、その手裏剣を渡す。突然なH夫の行動に、私もDも、少々、驚いた。あんなに、ブーメランがで上がるのを、楽しみに待っていた筈のH夫なのに……。

「H夫ちゃん、これ、あの木の天辺迄、飛ぶかも知れない、よく飛ぶ、ブーメランなのよ」

「うん。でもね、これ、Dちゃんにあげるの」

「えー？ 僕に？」

「じゃ、シエンチェイにあげる。だからね、もう一つ持って！」と、真剣に私に頼む。

私は、H夫に嫌われてしまったブーメランを、少々、情ない思いで、じーっと眺めると、真中の折り目に、折り紙の裏の、白色がちょっとはみ出て見え、あまり、奇麗に折れていない。「あーあ、これだな！」と、私は気がついた。

「Hちゃんが、いらぬのなら、僕、欲しいな」と、幸いにも、貰い手が出たので、H夫は喜んでYに渡す。

二個めのH夫の、ブーメランは、心をこめて、丁寧に折

った。H夫は、今度は、一目見て気に入ったらしく、ニコと笑って、満足そうに「ありがとう」といい、スキップらしい足どりで馳けて行った。

私は、手裏剣の目的は、ただ、少しでも遠くへ飛ぶ事にあるのだと思ひ込み、そして、子どもたちの目的も、そこにあるのだと考えていたようである。「これは、よく飛ぶのよ」と、誤魔化しのことばで、少々「へなちょこブーメラン」でも、子どもたちに許してもらえらるものと思ひ込んでいた。

だが、三歳児のH夫には、良く飛ぶブーメランなどは、問題外であつたらしい。奇麗に折られたブーメランは、H夫の手の中に有りながら、H夫の心を乗せて、無限な遊びの世界に、連れて行ってくれるらしい。

もう既に、H夫の心は、ブーメランに乗って、飛び立って行った。H夫は、三歳児のK子やM子が遊んでいる所に行つて、両手に挟んで、暖めているブーメランを、K子とM子にそつと、手の中を覗かせるように見せては、ニコニコと笑っている。K子・M子も、H夫の手もとを覗き込んで

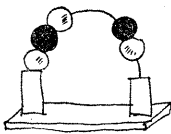
では、三人で、顔を見合わせ、クスクスと笑っている。

私は、現実に目を奪われて、手裏剣は飛ばせて遊ぶ物。そして、できるだけ遠くに飛べるようにと、その事のみを考えていた。まことに、デリカシーの欠けた教師であつた。

H夫が、自分の両の手のひらで、ブーメランをそつと包んだ途端に、そのブーメランは、H夫の夢がいっぱいに乗つた、大きな翼に替わってしまった。遊びの世界に、クルクルと飛んで行く、「ハート」を持った、三歳児・H夫であつた。

その時、私とH夫との間には、天と地と程の、ずれがあつた事を、痛い程、感じた時間であつた。

(靈南坂幼稚園)



# 私の保育

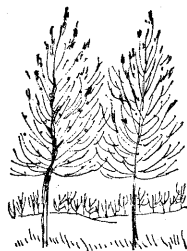
中島佐知子

六月のある土曜日のことです。子どもたちは、降園の身仕度も一人で行けるようになり、それぞれが、カバンや帽子や、いつも土曜日に持ちかえる手拭用タオル、コップ、それにうわぐつなどを、母親お手製の手さげ袋にしまい入れ、床につけられたビニールテープの目印の位置に、送迎のコース別に並んでいました。そのうちに、手早に並んだ子どもたちの間から、「とんとんまーえー」のかけ声が起こり、ゆっくり型の子どもをあわてさせながら、次第に四列となって、上手に並んでいきました。

その時、「おやっ」と一瞬耳を疑いました。騒々しいか

け声の中から、ひときわ高く、発音のおかしな「トントンマーエイ」という声を聞いたのです。私が、思わず声の方を振り向いた時、「せんせーい、Kちゃんがっ」「Kちゃんが、にほんごをはなしたよっ」子どもたちも、口々に驚きの叫び声をあげたのです。

Kは、子どもたちの視線の中で、身動きもせず立っていましたが、その笑顔は、こぼれそうな程のよろこびに輝いて見えました。私は「良かったね」と、胸の高鳴りを押えながらKの頭を撫でたのです。南米チリーから来て、最近、ようやく周囲の子どもたちとも遊べるようになったK



の、はじめての日本語は、何と「とんとんまーえ」でした。

Kは、四月に二年保育の年少児として、入園しましたが、生活様式も環境もまるで違うし、言葉もわからない為、園生活にも馴染めませんでした。六月に入ってから、ようやく担任の私の傍を離れて遊べるようになりましたが、Kが、次第に安定していくまでに、子どもたちは、常に援助の手を差しのべてやり、まるでKの兄や姉であるかのように、優しくいたわっておりました。

園内では、毎年海外に転出する子どもが何名かおられますが、他にも、海外で生まれた者、海外生活経験のある者も随分おられますので、あるいは、そうした経験や父兄の姿勢などが、末っ子で我がままなKを、外国人扱いすることなく、暖かく受け入れることができた一つの理由ではないでしょうか。

もう一つは、園側の掲げる「子ども観」「保育観」が保育生活に滲透して、子どもたちの自主性、主体性を徐々に伸ばしているのではないかと考えます。

筑波研究学園都市の計画に伴い、私どもの幼稚園が設立されて、四年目に入りますが、当初二十七名だった園児数も、今年から二年保育になったせいもあって、百八十名と、大所帯になってきました。私ども職員は、本年度の努力事項として、

- 1、子どもに即する教育
- 2、自主性、主体性を育てる教育
- 3、創造性を育てる教育

の三つを掲げて、スタートしましたが、今年就任された若手の女子園長の指導に基づき、これまでごく当り前のように成されてきた幼稚園での保育内容、方法、計画が、本當に右記の努力事項を達成し得るものかどうか、一つ一つ検討しながら、子どもの生活形態をより良いものへと変えていこうとするものです。

これらの吟味、検討、改善については、通常月曜日の全体会、金曜日の学年会などで討論が重ねられます。時々、意見が分かれ、個々の意見を述べ合いながら、七名の職員



が頭を抱えることもあります。新採用の職員も経験のある職員も、真にどういふ子どもを望ましいと思うか（子ども観）、どういふ保育が良い保育なのか（保育観）を考えない訳にはいきません。

私など、子どもたちと遊びながら、よろこび合いながら、見出すことがあり、いつの間にか、保育観までが変わっていることに気づくこともあります。保育の深さ、むずかしさは、底なし沼のようにも思われ、悩みや反省も年々増していくようです。

これまでの保育者としての生活を振り返る時、未熟な自分がひどく遠まわりをしながら、汗だくになって歩いてきたようにも思えるのです。学校を出たての頃の、意欲に燃えた自分の、体当りの保育は、とかく自分本位で、子どもたちを引っぱりまわしていたのではなかっただろうか。また三年、四年と経験するうちに、保育全てをわかったように思い込み、子どもたちの活動に何かと教育的位置づけをしたがり、保育を技術的に考えたり、先輩の保育指導が大変気になったり……。当時の私には、望ましい保育のあり方について考えたり、自分の保育に疑いを持つゆとりもないうままに、無我夢中で進んでいたのではなかっただろうか。

か。

そして、結婚、出産。現在三歳になる娘と、一歳の誕生日を迎えて間もない息子の母となった自分の中に、ようやく保育者としての芽生えを感じるこの頃です。職業という意識の枠を越えて、子どもたち一人一人の発育を案じたり、父兄の気持も理解してあげたいと思えるようになりました。むずかしいが故に、よろこびもまた大きい保育の世界は、本当に素晴らしい世界ではないでしょうか。

○

それでは具体的に、どのような保育形態が一人一人の子どもに即した教育、自主性、主体性を育てる教育を達成し得るのでしょうか。

朝、いつものように期待に弾ませて登園した子どもたちは、所持品の始末やうがい、おたより帳のシールはりなど、朝の習慣活動を自主的に済ませた後、それぞれに、自分の好きな遊びを見つけて取り組んでいきます。それら自由あそびも、子どもたちが見つけ易いように、たくさん場の設定を用意しておく事が必要に思います。

教師は、消極的な子ども、遊びに入れない子どもを、いかにして遊びの世界に誘い入れるかといういろいろ試みながら、友だちとなって、あちらこちらの遊びの仲間に加わり、一人一人の発想や、要求を、できるだけ可能なものにしてやる為に、目立たぬ程度に必要な応じた助言や手助けを与えながら、子どもが遊びに熱中できるような状態にもっていく事が大切でしょう。しかし、あそびによっては、発展させていけるだけの豊富な材料を用意しておかなければならないと思うのです。せっかくの発想も、材料のとり合いや、確保に追われていたのでは、じつくりと遊ぶこともできません。

それと、もう一つ大切な事は、常に、たっぷりと余裕のある時間ではないでしょうか。これまで、私自身経験してきた保育形態ですが、自由あそびの後、一定の時間にレコードや、チャイムの合図があり、それまでの遊びの片づけが、半ば強制的に行われて、一斉指導が展開されるのです。

もし、子どもたちそれぞれについての遊びが、一区切りついた時点での合図であれば、片づけ作業にもきつと精が出ると思います。しかし、まだ熱心に遊んでいる最中、合

図をきいて「つまらないなあ」という言葉が、子どもの口について出たとしたら……。保育者として、子どもたちに「つまらない」と言われる位、悲しい事はないと思いません。しかも、子どもたちの中には、自由あそびを「あそびじかん」、一斉のあそびを「おべんきょうのじかん」だと考える者がおり、それを聞いた時、胸が痛くなる思いをしました。

このような保育形態からですと、たとえわずかなことでも、一つの遊びの完成や、そこから生まれるゆとり、自信へのつながり、そして子ども自身の成長へのよろこびを、どの程度まで味わわせることができるのだろうか、疑問や改善の策を抱かすにはいられないのです。

個人差の激しい子どもたちですから、自分から遊びを見つけて、熱中できるまでに要する時間にも著しい個人差があるものです。いきなり、あそびをストップされたために子ども自身で見つけようとした何かを、見つけられずに終るばかりか、物に熱中できなくなったり、物を乱暴に扱うようになったら、それこそ大変です。

子どもたち一人一人に、わずかな充実感でも良い、それを味わわせてあげたい。その為には、余裕のある、たっぷり

りの時間を用意しなくてはならないと思うのです。

こまぎれでない、ゆとりのある許容的保育形態の中で、毎日思い思いに遊びながら、連がりのある展開をみせる子どもたちの姿は、どこか伸び伸びと育っているように思われます。その上、毎年のように問題になっていた、いわゆる「はみだしっ子」の存在が、今年感じられないのもうれしいことです。

○

現在、私の持つ級では、去る七月から転入した女兒（インドネシヤ人）と、九月にもフランス人の女兒を加えて三十三名、言葉や習慣の違いに悩む様子も見せずに、元氣よく登園しています。村立の給食センターから届けられる昼食、その昼食までのたっぷりぶの時間を、砂場や園庭や保育室一杯に散らばって、室内など足の踏み場もない位の繰り広げようですが、熱心に遊び込んでいます。

子どもたちの遊びをみると、いろいろな遊びの設定の必要なことが良くわかります。例えば、ままごとコーナーで、はじめ家族づくり熱中した男女女兒が、買物に出か

けていって、別のコーナーで画用紙に描いたり、切ったりして、様々な物をつくって戻ってきます。そしてそれらで一時を遊んだ後、テレビを見ましょうと、積木を運んできて組み立てて、あれこれ話しながら遊ぶ。

中には、ひごを何本かテープでつないで、先端よりピニールひもを下げ、画用紙でつくった魚をつけて戻る家族がくると、次々に魚つりが始まり、一つの遊びは、数々のあそびを繰り入れて遊ぶ程に楽しさも増し、飽くことを知りません。私自身、たのしくてたまらないことがあります。

「あっセンターの車がきた」誰かの声で、あそびは次第に片づけへと変わっていきます。十分に熱中できた時は、片づけも上手にできるようです。

降園前のひととき、季節のうたや小さな物語や時に反省会をひらきます。また、明日の遊びについて話し合い、明日に期待をもって帰っていく子どもたちの為に、放課後の広い保育室で、一人思案する私です。

（桜村立竹園東幼稚園）

# 幼児は自然の中で育ち合う

——幼児教育に対する両親の意識調査から——

西本美節

文部省が昭和四十七年に「幼稚園教育振興十カ年計画」を実施し始めてから昨年度で、ちょうど後半期に入りました。この間に幼稚園教育はどの程度振興し、幼児を持つ両親の希望はどれだけかなえられるようになったでしょうか。

公・私立の幼稚園が新設されたり、学級が増設されたり、公・私立幼稚園の設置運営費・施設費及び設備費に国庫助成が行なわれるようになり、都道府県からは私立幼稚園運営費補助や、保護者に対する就園奨励費補助が行なわれるようになりました。その結果、確かに就園率は増大し、昭和五〇年になると、幼稚園には、公・私立を含めて六三・五%、保育所には二四・六%、合計八八・一%の幼児が保育を受けています。就園率が高くなったことは好ましいことですし、親の意識が、幼児教育に向けられるよ

うになったことも確かです。けれども、施設の増加、就園率の向上を喜ぶだけでなく、幼児教育に対する両親の意識の内容を知る必要があります。

## 両親の育った社会と現状

第一に乱塾時代と言われる現在、親として子どもにすべきことをしているでしょうか。高度成長時代に学童期・青年期を過ごした戦後派の親が、インスタント加工に慣らされ、集団教育の美名に隠れて、子どもの教育を委託加工的に、幼稚園や保育所に任せて就園させているかも知れません。

第二に、六四%の家庭が子ども二人であり、一人子も多く、四人以上となればわずか二%しかないような少数精鋭主義では、文

字・数教育などを中心とした、保育を逸脱した知的早教育を求め  
る傾向がみられます。

第三に、教育の機会均等の恩恵を受けて成長し、高校卒業以上の  
学歴を持つ両親が六九%にもなり、そのうち大学卒業の父親が  
三〇%余り、母親も、短大・大学卒業が二〇%になり、専門職の  
ための職業学校卒業が両親共に二五%にもなっていることからみ  
ると、高学歴に伴い両親の共働きの理由が単に経済的な困難から  
だけとは言い難く、専門的職業の意識の高揚を持つ者がふえてい  
るようです。

第四には、女性の退職後の職場復帰が難しく、育児休暇もあま  
り認められていない社会情勢からみ、結婚・妊娠・出産・育児  
など白眼視される中でも、仕事を継続せざるを得ない状況にあり  
ます。

第五には、生活様式の変化、マンション・カー・冷暖房・乾燥  
機・電子レンジなどデラックス化されると、経済的要求もますます  
高められる結果となり、物質的要求と共に、生活様式が人々と  
同様になるか、物質的には到底人並になれないとなれば、その要  
求は、少数の子どもに向けられ、教育投資という型が生まれま  
す。

いずれにしろ、自分で手を下すことより先に、安易に他人の手

を借りたり、マスコミに振り回され、すべての生活基準が、マス  
コミの情報のみ頼り、自己主張はするが、自主性に欠ける依存  
的な親も多く見受けられます。給食や、インスタント食品で成長した  
現代の親にとって、高学歴化は必ずしも、高い人格や教養をもた  
らすとは限らず、単なる教育年数の延長としかみられません。し  
かし、自分で子どもを産み、育てることにより、新しい目が開か  
れます。このようないろいろな背景のもとにエゴイズムをむき出  
した両親の教育を行なうこと、幼児教育の本来のあり方を示すこ  
となど、保育者の負う責任は計り知れないものがあります。

この際、私たちは保育の原点に帰り、現代社会の要求、両親の  
意識や、現状をしっかりとつかみ、未来社会を見通して、幼児教育  
の真理を求めなければなりません。

#### 両親の意識調査の実施

今回、幼児教育に対する両親の意識の一端を知るために、父親  
二一九人、母親三八六人の協力を得て面接し、就園・未就園の理  
由、就園前の施設及び保育の見学の有無、教育施設の行事への関  
心、施設及び保育に対する満足度、将来の教育施設像などについ  
て意見を聞きました。

それと同時に、幼児にとって、施設教育よりも多くの影響を受

ける家庭教育の面も見逃すことができないので、家庭教育の必要性、子どもをしかったり、ほめたりしながらのしつけ方、期待する幼児像、文字や数教育・けいこ事などへの関心、子どもの仕事及び家業との関連や、親子関係、子どもの将来の人間像などについても話し合いました。

両親の意識調査は、アンケートや質問紙法によれば結果の集計が容易であり、分析や比較研究もしやすいのですが、アンケート調査では回答が建て前論に陥りやすく、両親の有りのままの気持や本心を知ることがむずかしいようです。したがって、きれいな事ではない本音を吐いてもらうために、ここでは面接法を用いました。(そのため調査結果の処理等が多少雑然としている点はお許し頂きたい)また、調査者の暗示や、誘導を避けるよう注意しましたので、比較的有りのままの姿で、両親の本心を知ることができたと思います。

この調査の対象は、就園率の高い京阪神地区の両親であり、就園状況は、三歳児四八・四%、四歳児八六%、五歳児九五・九%、六歳児一〇〇%で、全体的にみれば、八六・八%となりま  
す。三・四歳児は保育所が多く、五歳児になると、幼稚園児がふえています。三歳児の五一・六%は未就園ですが、小さいので手元において育てたいと両親は希望しています。

### 両親の意識調査の結果

高就園率を示しているこの地区の両親は、どんな園へ就園させるかについては、第1表Aのように意識が低く、その理由は、第1表Bのように無関心が半数で、残りの半数は「兄弟と同じ園にやりたい」など、人まかせになっています。就園の直接の動機は、通園に便利で近いからということですが、その理由は、第2表

就園前の見学 (第1表A)

	見学した	見学したい	その他
父	18.0%	60.7%	21.3%
母	24.3	61.1	14.6

見学しない理由 (第1表B)

分類	項目	父	親	母	親
情報	妻にまかす	16.2%			0%
	人からきく	10.8			9.6
既知	兄弟が就園	8.1			21.1
	親と同じ	0.9			0.9
行政	先生を知る	0			2.9
	公立だから	0			3.3
行	小学校へ直結	0			1.9
	決っている	4.5			6.2
	無関心	59.5			54.1

就 園 理 由 (第 2 表)

分類	項 目	父 親 %	母 親 %
家庭の事情	経済的、共働き		
	家庭の不健康、弟妹に手数	14.2	20.2
	兄弟が園に行く、しつけを家庭で		
社会事情	評判がよい		
	知人のすすめ	6.1	4.6
	世間の通例		
保育年限	1年がよい		
	2年がよい	6.6	3.6
	3年がよい		
保育事情	専門家にまかせる		
	設備・環境がよい 長時間保育、給食がある、人数が 少い	6.1	7.6
通園事情	スクールバスがある、決っている		
	近い、近所の友達がいく 友達がない、子供の希望	33.8	32.8
幼児の事情	社会性 (規律・一人子・集団生活 友人・協調性・道徳など)		
	性 (自主的・活発・甘えた 格 (明朗・性格形成など)	32.7	31.2
	能 (勉強・知識 力 (体力など)		

のように多岐にわたっています。母親の就業による共働きも、多少増える傾向にあります。

教育施設の行事については、自分の子どもや近所の子どもがわかるので必要だとし、母親だけでなく、その時を父親も楽しみにしています。教育施設への積極的不満はあまりみられませんが、今のままでも、良い園と思っている順位を第3表で見ま

しょう。

一位は「のびのび遊べる」園で、「教師と子どもの人間関係がよい」ことを好ましく思っているが、父親は、「しつけの厳しさ」を、母親は「設備がよく、楽しい園」を良いとしています。表には、三十項目余りの中から五位までしかあげませんでした。その他の項目としては、教師の人格・教育態度・長時間保育のほかに、幼児への配慮として、集団性を養う・才能を伸ばす・体力づ

良い園の順位 (第3表)

順位	父	親	順位	母	親
1	のびのび遊べる	10.6%	1	のびのび遊べる	14.8%
	設備がよい	10.6			
2	人間関係よい	10.2	2	人間関係よい	13.0
3	敷しいしつけ	7.8	3	設備がよい	7.8
4	自然が多く広い	7.3	4	楽しい園	7.2
5	専門職の自覚	6.9	5	自然が多く広い	6.5
				専門職の自覚	6.5
				人格者(教師)	6.5

くりなどありましたが、各家庭や親の受け止め方は、さまざまです。将来の幼児教育施設像についても、種々多くの希望や、期待がみられます。その内容は第4表のように、施設に関するものが多く、制度への要求もみられます。順位は、第4表Bに示す通り、

「人間性の尊重」

が第一位で、幼児期はいろいろなことを教えられることよりも、子どもなりに人間性を豊かに育ててほしいと願っており、一家の経済をになう父親は保育料の無料化や、よい設備など物質的な環境を、母親は一園・一クラスの規模を小さくし、幼児四

〇人に一人の教師では行き届きにくいので、一学級の幼児数を減らし教師を増員し、教師の人格・教養など質の向上による人的環境の改善を望んでいます。

母親は父親よりも、日常の保育や教師に直接触れる機会が多いからだろうと思われる。一園に二〇〇人も、三〇〇人もの園児数では、幼児自身が、大勢の集団の中で威圧感を感じ、伸び伸びと個性を発揮できず、母親どうしも、二年間同じ園にいながら、一言も言葉を交すこともできず、親しみも持てないという不満も聞かれました。

順位に多少の違いはあるにしても、どの幼稚園も、保育所も同じ遊具ばかりでなく、もつと自然を取り入れ、木蔭や芝生・草原を入れ、既製の遊具にとらわれず、平地ばかりよりも、自然な起伏がある方が遊び場に向いているのではないか、教師の数が多く、一園の幼児数が少なければ広々とした戸外遊びが十分できるように思う、という積極的な意見もありました。

これらの背景には、住宅の高層化、住居の狭まり、遊び場の不足、屋外の危険の増加など、子どもにとっての悪条件があり、せめて保育施設の中で、子どもどうしの接触を深め、毎日自然に親しむ機会を与えられ、欲を言えば、二年間保育の義務化と、公私立の別なく、保育料の無料化が望ましいが、宗教教育の自由、一



将来の幼児教育施設像 (第4表A)

分類	項目	父親 %	母親 %
教師	年配者 (若すぎる・経験者)	7.6	10.1
	質の向上 (人格・教養) 男子教師		
施設	自然を多く広々と (遊具を減す) 設備のよい 長時間保育 教師の増員 (規模小さく 20人~15人に1人)	33.6	31.9
制度	無料化 公立増加 公・私との区別なく 誰でも入園できる 義務化 (2年)	27.7	20.1
保育方法	しつけを親と協力 人間性の尊重 音楽・絵・英語教育 小学校との一貫性	15.6	22.4
現状のままでもよい		6.3	6.5
その他	その他、関係ない 老人福祉より優先など	9.2	9.0

将来像の順位 (第4表B)

順位	父親	順位	母親
1	人間性の尊重 13.0%	1	人間性の尊重 16.6%
2	無料化 11.3	2	教師の増員 12.0
3	設備がよい 10.5	3	自然が多く 8.4
4	自然が多く広い 8.8	4	無料化 7.3
5	教師の増員 8.0	5	設備がよい 6.9
6	長時間保育 6.3	6	教師の質向上 5.7
7	義務化 (2年) 5.9	7	義務化 (2年) 5.4

つしか就園する所がないとか、地域で決められた施設に通うのでなく、家庭の事情や子どもの性質によって、二・三園の中から選んで就園できるようになればよいなどの意見もあり、地域によっては、現在就園していても、必ずしも適当な施設に恵まれていない人々のいることもうかがえます。また、教師に若すぎる人が多く、特に男児には女性だけでは優しすぎ、思考・行動上に、もっとダイナミックな広い視野や、科学性をもった若手の男性教師の

必要性を求める声も聞かれました。家庭でも教育が必要と認めている両親は九〇・五％ですが、「不要」「わからない」と答えた者が約一〇％いる点も考えなければなりません。その教育内容の中で最も力を注いでいる面は、「日常生活などのしつけ」で二〇・七％、次いで「他人との交際」が一五％です。わずか四％ですが、「知識教育」もすべきと考えています。

しつけ (第5表)

分類	項目	父親	母親
性格	素直, はっきり言う, けじめ たくまし, いたわり, 自主的 理性的平等, 明るく, 忍耐 正直, よい人柄など	24.9	34.7
対人関係	行儀, 礼儀 挨拶などことば 約束・きまりを守る 善悪の判断, 迷惑をかけない 友人と仲よくなど	55.0	45.0
自立	自立, 食事 安全など	13.9	13.9
その他 (親孝行・女らしく)			2.4
自由にする		6.2	4.0

「しつけ」の内容は第5表に示したように、父親は、礼儀・あいさつ・善悪の判断など社会人としてのエチケットに、母親は人に迷惑をかけない・善悪の判断・言葉づかいなど、やや自省的消極的でルールに反しないような配慮をしています。

しつけを始める時期については、生後すぐからという母親が二四・九%、一歳からは父親が二〇・四%、三歳からは父親が四六・三%、母親が二六・七%というように、父親は三歳頃が最も適当とし、母親はその時に応じて生後から三歳までの間に、各年

齢に見合ったしつけを徐々に行なうのがよいとされています。母子関係の方が父子間よりも密度が高く、成長にしたがった型になるようです。

子どもから将来の進路を相談された場合に、両親の半数は子どもの意見を尊重するとしながらも、父親は、自分の経験を土台にして子どもの進路を示すことによつて、父子関係の成立をみせています。家業の継承については、父親は本人の意思次第としてはありますが、できればあとを継いでもらいたいという心願がみられ、これも自分の経験からの表現でしょう。

このように、日常生活面は母親が、将来の見通しについては父親がそれぞれ役割分担し、幼児期では母親の暖かい接触と、父親の楽しい遊び仲間としての人間関係がみられます。

子どもがどんな時に、しかられたり、ほめられたりして、両親からしつけを受けているかは、第6表に示したとおりです。これによると、父親はおとなの言いつけに従うようにしつけ、母親は自分のことを自分でやろうとし、どんなささいなことでも最後までやり遂げるように励ましながらしつけようと心掛けています。子どものけんかについては父親の方が比較的見守る態度を示しますが、母親がけんかをがまんできないのは、子どもと身近に接触しているときが多いためでしょう。

叱る・褒める事柄 (第6表)

分類	叱る			褒める		
	項目	父親	母親	項目	父親	母親
態度	言うことをきかぬ 約束を守らないなど	44.5	38.9	言うことをきく 約束を守る	20.1	15.9
行為	片付けない (ちらかす) いたずら, 迷惑をかける	3.8 1.3	7.1 9.4	片付ける 手伝う	5.7 18.1	6.5 14.3
対人関係	けんか	13.4	16.1	仲良くする	9.8	12.4
自立	食事・着衣できない	10.5	7.3	自分のことを自分でする	11.3	16.6
対話	悪い言葉	2.5	4.2	上手に話す	8.2	5.3
仕事	横着 (我まま)	13.9	11.7	最後までやりとげる	11.9	18.2
その他	泣く, おもらし, ふざけ	3.8	3.4	おもいやり	7.7	7.8

幼児像 (第7表)

分類	項目	父親	母親
性格	素直, 意志が強い, たくましい ハキハキ言うことができる 豊かさ, やさしさ(いたわり) 広い心, 明るい, のびのび 忍耐など	65.1	68.3
	対人関係	礼儀正しい, 道徳的 迷惑をかけない, 好かれるなど	10.1
	身体が丈夫で元気な	18.1	11.9
その他	頭のいい 子供らしい, 女らしい	6.7	5.7

文字・数教育については、父親の五四・一%、母親の五〇・三%が教えています。気持ちの上では父親の方が、母親よりもやや積極的な態度で、教える時期も父親は三歳児を主にしています。母親は三歳頃から五歳までの間に教えればよいと、おうようです。学齢期に近づくとも母親の方が内心あせりながらも、子どもへの働きかけはあまりみられません。

けいこ事は母親の方が熱心ですが、している子は男児では六歳でも三四・八%と低く、女児では四歳で四七・八%、六歳では七三・二%となり、はっきり性差がみられます。数少ないがその種

人 間 像 (第8表)

分類	項 目	父 親	母 親
性 格	素直, 責任感, まじめ 意見をはっきり言う 豊かさ, 創造性, 忍耐	27.5	37.8
対 人 関 係	立派な人間, 道徳的, 迷惑を かけない スケールの大きな人間 信頼される (好かれる) 人の 役割に立つ 常識ある, 親孝行など	26.1	31.3
知 的	頭のいい・才能・個性 医師・弁護士・科学者・警官 看護婦・教師・保母	20.8	14.5
人 生 観	平 凡 強く生きる	25.6	14.5
そ の 他			4.6

類は、男児の場合、習字・数・英語など学習塾、女兒の七〇％は  
バレエ・ピアノなど音楽関係です。

両親の望ましい幼児像については、第7表に示したとおり、す  
なおでやさしく、明るいじょうぶな身体で元気な子どもであり、  
人に好かれ、女の子は女らしく、男の子は意志が強く、ハキハキ  
と物事が言えるようになることを望み、将来どんな人間に成人し  
たらよいかについては、第8表のように、性格・対人関係・知的  
水準・人生観などほぼ平均化した期待がみられ、特に父親は実社

会との接触からほとんどすべての面で円満であるような  
人間像を、母親は性格・対人関係をやや重視し、身近な  
人間どうしについて考えるのは当然でしょう。豊かで、  
人に信頼され、才能や特技をもちながら、平凡でしかも  
強く生きるバランスのとれた人間像を描いています。

## 結 び

意識は決して低いとはいえませんが、施設教育につい  
ても、家庭教育についても、父親として、母親としての  
特色はほとんどなく、平均化した意見が随所に見られま  
した。教育に関心のある両親であるのに、「主人と話し合  
います」とか「家内がそう言いますから」などと、夫婦  
の相互信頼は好ましいことですが、どうも相互依存的な態度がみ  
られ、言葉づかひも、父親の方に母親より優しさといねいさが  
みられました。

最近の女性の男性化、男性の女性化的傾向がうかがわれ、画一  
的思考の中で、おとなしく育てられ、消極的な自主性の乏しさと  
いうか、個性の埋没が見られます。人と協調することは大切ですが、幼稚園・保育所という集団の中で、一人一人の個性が生かされることも必要ではないでしょうか。

そのためにも、広々とした大自然の営みの中で、子どもどうしの接触によって自然に育ってくる自由な人間性の認め合いを、教師は静かに見守り、保育する高い人格と教養が大切です。

「教育問題に関する東京都の世論調査」にもあるように、「教師の質の向上」「大学における教員養成と現場研修」なども考えながら、親たちの意識の向上を図りつつ、情報過多の現代を生きる幼児たちが、協動的でありながら、自主的で、正しい選択力を持ち、多角的で柔軟な思考力と、判断力を備えられるように、幼児教育を幼児にふさわしく、あらゆる面で再検討する必要がありますが、しょう。

(神戸常盤短期大学)

二月に入ると、立春そして

て節分がすぐにやってきます。節分の夜には、豆をまきます。その豆まきに、こんな思い出があります。

二、三年前のこと、母が

豆まきの大豆を用意していませんでした。母が言うに

豆まき  
堀田冬子

は、おつかいに行つたけれど、大豆はもうすでに、みんな売れてしまつて無いというのです。

母がつけ加えて言うにはあなたたちは、もう大きいのだから、豆まきをしなくてもいいでしょうということ

とです。

ところが、これに対して意外にも強い不満を表わしたのは、私達姉弟ではなく、帰宅した父でした。

節分に豆まきをしないで過ぐすというのは、おかしい。豆ぐらいどこかで売っているだろうと言つて、自分で捜しに行きました。

帰ってくると、豆は豆でも、虎豆を携えています。

これしかなかったというところで、父は声をはり上げ、虎豆をまきました。

しかし父曰く、「鬼のパンツは虎の皮だな。虎豆で鬼を退散できるのかな…」

## 映像の中で背中が表現する

### 愛・別れ・孤独

高沢 英一

フランスの女優で、シモーヌ・シニョレという人がいる。美人ではないが、人生の陰影をみごとに表現する演技力で、シャンソン歌手のイブ・モンタン夫人として知られている。この人を思い出すたびに、私の頭には、彼女のがっしりした幅広い背中のイメージが浮かんでくるのである。

彼女とローレンス・ハーベイで共演したイギリス映画「年上の女」(一九五九年)。野望に燃える青年と、年上の人妻との間にかわされる明日のない愛。逢いびきの後で、青年が見送る中、背中を見せて舗道を歩み去って行く人妻。彼女は、背中に青年のまなざしを感じながらも、ふり返るうとはしない。そして、前を向いたまま手をふって、背後にいる青年に別れを告げる。カメラは、シモーヌ・シニョレの後姿に向けられたまま、彼女が背中では表現する情感をとらえたのであった。

この愛がままならないということを知りながら愛さずにはいられない。やがて、別れは必ずやってくる。愛する女の哀

しみと切なさ。シモーヌ・シニョレは、背中を見せて投げやりに手をふってみせながら、女のせい一杯の気持ちをあらわしたのであった。この時のシニョレほどに巧みな背中の演技ができる俳優には、かつてお目にかかったことはない。

別れの演技といえば「カサブランカ」(四三年)のラスト・シーンも同じことだ。霧にけむる夜の空港で、夫とともに飛行機に向っていくイングリッド・バーグマンの後姿を、じっと見送るレインコト姿のハンフリー・ボガード。この場面では、登場人物すべてが背中の演技を見せてくれた。夜霧の中で別れにすすり泣いているようなバーグマンの後姿、絶ち切れぬ思いを背中いっぱい表現していたボギー。忘れられぬ名場面だ。

愛と別れ、そして孤独。イタリアのミケランジェロ・アントニオーニ監督も、「情事」(五九年)で印象的な後姿の場面を残した。失踪した恋人をさがす男と、恋人の女友たち。男は、恋人をさがすうちに、その女友たちと愛し合う仲間になっ

てしまう。冷たい風景に取り囲まれながらベンチに坐って涙を流す男。男の頭に手をやりながら茫然とたたずむ女友だち。カメラは、その二人の背中をじっと凝視しながら、愛というもののあいまいさ、表情のない不毛の愛を描いたのであった。

太陽に向かって歩み去る男と女の背中の中のシルエット。そこには自由と喜びが満ちあふれている。これは、チャールズ・チャップリンの「モダン・タイムス」(三八年)の有名なラスト・シーンだ。機械工をクビになりルンペンになってしまったチャップリン。彼は、波止場で食物を盗んでいた娘と知りあい、やがて感化院の手から彼女を救い出して、二人手を取りあつて旅に出ていく。「元氣を出しな。明日という日があるじゃないか」。チャップリンの背中には名セリフを残して、見る者に感動と生きる勇氣を与えたのである。

私たちが、ごく身近で背中の中のイメージを思い浮かべる時、それは暖かくて少しきしゃやかな母の背中であり、がっしりしていて、ちょっと孤独な父の背中である。

山田洋次監督の「家族」(七〇年)で、主演の倍賞千恵子は、背中に幼い女の子を背負いながら長崎から北海道の開拓村へ向かうしつかり者のお母さんを演じた。一家五人が、旅

の途中でバラバラにならぬようにと、大黒柱となって夫や子どもをばげます若い母。東京で、背負っていた女の子が病いで死んだ時には、さすがのしつかり者も絶望のどん底につき落とされた。母の背中のぬくもりが子どもを包みこむ愛情は、限りなく深い。

ちょっと変わったところでは、黒沢明監督の「用心棒」(六一一年)などで、三船敏郎が見せた背中の中の演技は、実に何ともいえず良かった。着流しの肩をいからして宿場町をかつ歩する浪人、桑畑三十郎。彼の背中には、放浪の果てにしみついた孤独と男の意地が、深い年輪となって刻みこまれているようだった。

かつて東大生が「泣いてくれるな、おっ母さん、背中の中のちやうが泣いている」という五月祭のポスターを作つて話題を呼んだ。この原型が、高倉健主演の任侠映画「昭和残侠传」シリーズ。その主題歌の中で、背中はさまざま表現をされている。「背中で吠えてる唐獅子牡丹」「背中で泣いてる唐獅子牡丹」「背中で呼んでる唐獅子牡丹」……。こうなると背中は、顔以上にさまざまな表情に富んでるとさえ言えるだろう。

(映画評論家)

## せなか



豊田 一秀

人間には身体の中で二か所だけ自分自身で見ることのできない所があります。それは自分の目と背中です。「見る」所の代表である目と「見られる」所の代表である背中、そのどちらも自分の思うままに見ることができないとは、神様のいたすらを考えてしまう私です。しかしそれだからこそ、この両者はことばより多くのものを人に伝えることができるのかもしれない。

たとえば背中が私たちに与えるイメージのひとつに悲しさ、寂しさといったものがあります。「肩を震わせて」泣いている人はおそらく私たちに背を向けて泣いているでし

ようし、また「肩を落として」歩いて行く人の心中を私たちはその人のうしろ姿から感じ取っていることと思えます。一方、私たち自身も人に背を向けられると悲しく、また寂しく感じます。

背中はずなせ私たちにそういったイメージを与えるのでしょうか。それは背中を見せている人が歩く時、普通自分との距離が離れていくということに関係があるように思えます。

しかし自分との距離が離れていくことは、悲しさと全く異なった気分をも私たちに与えてくれます。それは自由感



です。人が遠ざかって行くに従って、その人との心理的緊張感はさがっていきます。すなわち自分から離れて行く人の心の中に自分が意識されなくなっていくであろうという解放感を私たちは味わうのです。

そもそも見るといふ行為が意識するという事に深くかわっているのに対して、見られる側である背中はいざい気配を「感じる」程度のことしかできないのが普通です。

道を歩いていて前を歩いている友人の背中を見つけた時、友人の背をチョンとつついて驚かすのも、またずっとそのままうしろを歩き続けるのも、さらに気づかれる前に遠ざかるのもすべて見ている人の自由なのです。その人の意識の中に自分が入っていないであろうという安心感、自由感（時には優越感）は、しばしば私たちのふるまいを自由にするものです。

自由にされるのは私たちのふるまいばかりではありません。子どものふるまいについても全く同じことが言えます。たとえば、おとなはよく自ら働きかけて子どもと手をつなごうとします。部屋に連れて行きたい時、危険な時、仲よくなりたいたい時など、場合は様々です。

そんな時、もしその子が元気な子で、「いやだよ、手をつなぐのなんて」とでも言ってくれるなら、おとなの気も楽なのですが、内気な子の時などそのやわらかい手の暖かみから、そして握る手の強さから、微妙な気まずさや迷惑そうな感じを私は感じるがあります。

それに対して、私が砂場に腰かけている時、机に向かって何か作っている時に、何気なく私の肩に置かれた小さな手のなんと暖かく自由なことでしょう。

幼稚園の朝の庭は良いものです。落葉の一枚までが子どもに拾われるのを待っているような静けさ。すずめもにわとり小屋の前でつかの間の朝食をついばんでいます。私は出口のペランダにすわって、見るでもなしに乗り手のいないブランコを見えています。すると一番に来た子が背中にとびついて「ワッ!!」

「やあ、おはよう。早かったねー」

そんな一日の始まりが私は好きです。

（お茶の水女子大学附属幼稚園）

## せなか

—親となつて思うこと—

中村美智子

我が子が二歳十か月になる頃、週に一度活動するある集団に、母子一緒に参加することにした。それは、家庭で母と子の縦の関係だけで一日のほとんどもを過ごすのではなく、同じ位の年の子どもたちがいるところで、横のつながりを無意識のうちに感じながら、次第に集団の一員として抵抗なく動けるようになってほしいということ、またそれ以上に、いたい我が子は、そういう集団の中にはいたら、どんな風に行動するのか見てみたいという気持ちをもったからである。

初めての日、彼はどんな感じでその場に臨み、あそんできたのだろう。おしげづいたり、頭から嫌がったりは全くしなかったが、何かオモチャを手にしても、本当に使っていないの自信がもてないで手に力がいらないなかったり、母の声かけを頼りに、母とのつながりを家にいる時よりも一層強く求め

ているようだった。他の人の誘いにも、そこに気に入った物があれば取りに近づくだけで、それ以外はほとんど無視。しかし、彼の目も口も嬉しきでいっぱいなのが私にはすぐ感じられた。何がそんなに嬉しいのだろう。回を重ねるうちに彼の嬉しきは落ち着きを加え、そここであそんでいる人たちの中で自分なりの位置を占めるようになった。この頃はおう、家を出る時から頭の中にしたいことがいっぱいつまり、つま先立ちをしているみたいだ。

彼がそうなってきたのと同じく、母である私も、彼を一步距離をおいて眺めるゆとりがもてるようになった。子どもは親の私物でないのは当然だが、理屈で知っていないがらも、実際赤ちゃんの時から接してきた態度には、愛育するのに自分の一部のようなところがあって、それ故にいらぬところどころでイライラしたり、疲れてしまったりもしていたことに気づか

された。子どもは親のせなかを見て育つと学んだり、実際そう思ったけれど、これまでの私の在り方では、子どもにせなかを見せる——子どもがせなかを見る——ゆとりさえなかったのではないかと反省するところが誠に多かつた。

せなかでの教育は、親も子も気づかないうちになされていくのかもしれないが、それがよりよくできるには、親と子が一步離れた関係にあることが必要である。我が子しか眼中になく、あれよこれよといらぬ手をかけすぎているのでは、子どもはそのうち無気力になるか、後ろをむいたままになるかで、自分から後ろ姿の親に語りかけようとする態度は生まれ難い。そして本当は、子どもは親の知らぬ間に親のさまざまな姿を見、それを敏感に感じとっていくものだろう。また逆に言えば、そこに一番親としての子どもを育んでいく力があるのだと思う。

彼が集団の中で楽しくてたまらないといった様子であそんでいるのを見る時、私の側にも大きなゆとりが生まれていく。私も一緒にその集団の一員として加わっていて楽しく、家庭にいる時とは比較できないほど彼を一人の人間として見ている自分を発見する不思議さも感ずる。その時彼の言うことばや動き方に、私は日頃の自分の姿を思い知らされるので

ある。私は彼のせなかを見ている。それは、もうひとりの私が見せているようにも思われる。いつの間にか私も自分のせなかを子どもにさらしていたのかと気付くと、恥ずかしいような何とも言えぬ気持ちになった。

今までは学ぶ一方で、自分の後ろ姿など意識したこともほとんどなかったが、今、親となって嫌でも見られる側になると、あらためてその責任の重さを感じずにはいられない。親子のより良い関係をつくっていく、親子がよりよく生きていくために、真摯な気持ちで日々の生活を送りたいと思うし、そう思っただけで、ゆとりをもって自然とよりよい子どもとの関係が生まれていく。

せなかには、自分ではとても気付きにくい部分で、また他の人からは最も目にはいるその人全体といってもよいものである。あたたかみのある大きなせなかを子どもが感じてくれたら……、そんなせなかをもてるようになりたいと願う。そこに近づくために、子どもと一緒に経験もひとつひとつ大切に身にとり入れながら、親として大きな気持ちをいだいて、これからもっと楽しくつき合っていかなければと思う。

# おと



村田修子

昔と比べると、今は随分いろいろなおとがするようになっておと思います。どちらかといいますとにぎにぎしいおと、乱暴なおとが多くなつたと、おとの種類の少ないときに育つた私などは思うのです。

おとといえは昭和二十六年頃からダンス関係のレコードの吹き込みに立ち合せて頂きましたが、その頃の事を振り返ってみますと誠にとおとは単純で、メロディが主にきこえて音程がはずれていなければOKでした。ときには「まあまあ」という状態でOKになることもありました。

先日の朝のテレビ番組の「いちばん星」にちょっとその光景の描写がありました。現在のようないくつかのテープがなかったその当時は、最初から終りまで続けて完全に録音できなないと片面ができ上らないのでした。例えば片面に三曲吹込むときは、その三曲ともが、ちゃんとできないと駄目なのです。

例えば二曲目までOKで、三曲目になって失敗するとまた

一曲目からやり直すことになりました。最初録音器のそばには原盤になるだろう盤がうす高く積み上げられています。失敗してやり直すたびに新しいのとかえてゆくのですから、みるみる新しい盤の山が低くなって駄目な方が高くなってゆき、まわりにいる者がひやひやして気をもみ出します。一曲目を歌うひとはつかれてきます。それを見越して歌いなれたのどの強い人をはじめにもつてくるということです。そんな時代のおとですから「まあまあ」ということになる場合もあつたようです。

少しときを経て今のようにテープにかわり、收音の機械も精巧になり、加えて編曲も多様な楽器を使い、強くにぎにぎしくなりましたので、長い時間ミキサー室にいと頭がつかれ、胸がどきどきするくらい迫力のあるおとになりました。またおとの強さが目で見ることのできる装置もつきましたのでそれを見ると本当に新しい時代を感じたものでした。

でもその迫ってくるおとは、ただ耳なれていない、というだけで、音楽的なもの、リズムがあり感情がこもっていますから感じとしては悪くありません。ベースなどの弦の底力のある響きも心をゆすぶるものがありますし、ボンゴなどの響きやリズムも人間が本来持っているリズムを呼びおこされるようで身近なものに感じます。現在のステレオなどもみなそれらの音を十分に聞かせてくれるので、その響きにもなれてきてしまっています。

最近身近なことで余り快よくない響きを感じる場合があります。それは朝、幼稚園の廊下で子どもを送ってきた母親と会ったときにかわされる「おはようございます」の響きで、心持ちが感じられないのです。

たしかに礼儀としては欠けていないといねいさで挨拶をなさるのですが、今が朝だから「おはよう」であり、相手が先生だから挨拶をする、このように感じられて仕方がありません。余りわざとらしいのもいやなものです。感情、心持ちのこもらない挨拶も、それが挨拶だけにすっぱかしをくったような空虚な気持ちにさせられます。

そういう経験をするたびに、母親が先輩として子どもにいろいろなるものを伝えたり教えるときが気になってしま

います。子どもにとって母親は、一番身近なものですから、ことばで教えなくても、その動作や表情、心持ちで教えることもたくさんあるはずですよ。

全く機械的なふん囲気ではやはりそういうものしか伝わらないし、育たないと思うのです。

母親だけでなく先生の立場でも同じことがいえます。

風が強く吹いて木の枝のおとがざわざわしますと、それで頭が痛くなったり、心が平靜でなくなります。自然現象の風のおとでさえそうなのです。先生が毎日の忙しさに振り回されて、心持ちが忙しげであったり、動作としても忙しく走り回ってばかりいますと、まわりにいる子どもたちも自然に落ち着きのないふん囲気ができてくるものです。

また場所、人数に調和しないような大きな声・おとの中にいることになってしまっている先生と子ども。これも、考えなければならぬことだといつも思っています。

それにつけても、一組の人数が少いとはいっても、どなり合うような話し方ではなく、本当に心で話し合っているような落ち着いた態度が身についていた外国の子どもたちの様子を思い出して、うらやましい、と思ったりしています。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)

★海外文献紹介★

## 魔術の効用

——昔話の發達の有効性——



THE USES OF ENCHANTMENT

by Bruno Bettelheim

New York: A.A. Knopf, 1976

人間を考える基盤として、神話や伝説など、昔話の役割が見直されている。教育課程をより人間的に改善する試みの一環に、神話を位置づけようとする論稿が、「Childhood Education」誌などにも現われ始めた。そんな動向の中に、現代アメリカ文化の幻想志向の一端を見ることは、容易であろう。アメリカ合衆国もまた、世界的な知性の流れに背かず、行き過ぎた合理主義からの脱却を模索している。健やかな過去をふり返り、日常的現実の彼方を透視するまなざしを、よみ返らせるべく努力しているのだ。

情緒障害児、特に自閉症児の治療家として高名なブルーノ・ベッテルハイムが、昔話に関する大部の著作を刊行したのも、このような背景の上で把えるとき、一入、興味深く思われる。「魔術の効用 (The Uses of Enchantment)」と題されたこの本の独語版は、「昔話は子ども成長に必要」という、より直截な題名を附されているという。確かにこの書物は、独語版題名の示すとおり、現代文化の中で成長する子どもたちにとって、昔話の發達の有効性を論じようとするのである。

## 昔話の効用



著者は、昔話と子どもの発達との関連を論じて、次のよう

に言っている。すなわち、子どもの養育に関して、最も重要で最も困難な仕事は、彼らが自分自身と出会い、自分が生きていることの意義を見出すのに、手を貸すことである。障害児と呼ばれる子どもに関してもそれは同様であり、彼らの治療教育もまた、子どもたちに生きることの意味を取り戻してやること以外にないだろう。そのためには、子どもたちを、現在を肯定し得る感情の中に置いてやらねばならないし、将来に対して希望を抱き得る状況を作り出してやらねばならない。昔話は、それに答える最もふさわしい素材なのである。

何故なら、一般には、子どもたちに、人生の明るい面だけを見せようとする傾向が支配的である。そして、恰かもそれが、彼らの肯定的な感情とつながるかのように、短絡的に考えられている。然し、子どもといえども、人生のダークサイ

ドから目をそらすことはできない。何よりも彼ら自身が、無意識の暗い力を内に湛えた存在であって、それらを拒否しようとするなら、逆に、その力に圧倒されてしまいかねない。むしろ、それらを見つめ、適切に対処することでそれを克服することが肝要であって、実存の苦しみとは、まさにそのようなものである。子どもたちもまた、人間の一人として、常にそれらの苦しみと闘い続けているのだ。

昔話はこの点で精神分析と同じである。つまり、人間存在のダークサイドに積極的に目を向け、それらを扱っているのだ。例えば昔話には、両親との死別或いは生別から物語の幕が開き、それによって様々な障害との戦いが始まるものが多い。両親との別離は、子どもにとって、成長途上に横たわる最大の難関であるから、まさに実人生そのものの反映でもあり、同時に、最も暗く不幸なできごとの象徴でもある。そこで、昔話は、それらを主題に据え、しかも、それをメタファーとして扱うことによって、子どもたちの実存の苦しみと極めて適切な向き合い方で、つき合っていくことができる。現代の子どもの本が、とかく暗いテーマを避け、日の当る部分だけを描こうとしているのに比し、昔話の真実性がここにあり。

現在を肯定的に生きるとは、暗いものに目をつむって、ただ徒にニコニコしていることではない。暗く重苦しいできごととも避け難く存在している現実を、「生きるとは、そのようなこと」と肯定して、その上で、積極的に乗り越えていくことなのだ。昔話は、そのような意味で人生そのものであり、象徴の次元でまさにリアルなのである。

しかも、昔話は、それら障害の克服のモデルを、物語の展開という把えやすい形で示してくれる。ヘンゼルとグレーテルは、自分たちのちえで魔女を殺して幸せをつかむし、白雪姫は王子と出会うことで、死の棺からよみ返ることができた。

現代文明という巨大な歯車の中で生きることを強制されている子どもたちは、さながら森に棄てられた物語の主人公のように孤独である。主人公たちが、果てしなく広がる森の中で、孤独な戦いをいかに戦い抜き、究極的な幸せをいかにしてつかむかは、子どもたちにとってこの上ない人生のお手本となり得るのである。

## 分析的解読の

### 面白さ



この本の魅力の一半は、著者が試みる昔話の精神分析的解読の面白さにある。グリム童話をはじめとする二十余りの物語が、フロイト派の分析医ベッテルハイムのメスによって、鮮かに解剖されているのだ。

人間の人格構造を、イド、エゴ、スーパーエゴの三体系から考えようとするフロイト流の人格理論が、昔話の構造分析に投影される。例えば、「三匹の小豚」の物語の中で、葉の家を建てる一番目の豚は、欲望のままに振舞うイドの象徴であり、苦勞して煉瓦の家を建てる三番目の豚は、エゴとスーパーエゴが発達し、人格の統合された安定状態を象徴する、と言うわけである。

さらに、口唇期、肛門期などと区分する発達説が、形象解に適用されて、「お菓子の家」は、口唇期的欲求の典型的な現われと読み解かれる。「お菓子の家」を貪り食べたヘンゼルとグレーテルが、究極的には魔女によって食い殺されか



けるといふ、口唇欲求の肥大化に直面し、一身の破滅に脅かされることになる。勿論、二人が全エネルギーを自我に集中して危機から逃れ得たのは、先に述べたとおりである。

フロイト理論を代表するかの感があるエディプス・コンプレックス説も、随所に顔をのぞかせている。というより、著書の後半は、エディプス的な諸問題に捧げられ、そのような見地から物語の解説が進められているのだ。エディプス・コンプレックスを、子どもが両親から分離独立するとき生じる障害との戦いと、広義にとらえるなら、それは、人間の成長にとって最も重要な課題であるに相違ない。母の言いつけを守れなかった赤ずきんの受難も、シンデレラや白雪姫の継母との確執も、すべてこの課題をめぐる多様な展開であり、克服の道すじを物語ることになろう。

こうして、ベッテルハイム流に昔話が読み解かれるとき、私どもは、次のような驚きに襲われるだろう。「昔話は、こんなにもよく、子どもの内的な世界を物語る素材であるのか」と。そしてまた、「昔話は、どんな教材書にもまして、子どもの、否人間の、内的世界を解き明かしてくれるのではないか」との想いにとらえられざるを得ない。確かに、二重、三重に読み解く眼さえ身につけるなら、物語は、人と世

界を映し出す奥行きを持った鏡として、限らない深みに読み手を誘いこんでくれるに相違ないのである。

## 附記

この本は、現在、翻訳が進行中であると言われる。邦訳書を手取る日の近いことを期待したい。また、昔話の深層心理的研究として、ユング派の碩学河合隼雄氏の労作が、先ごろ単行本として刊行された。<sup>\*</sup>前者はフロイト派、後者はユング派という党派性を超えて、どちらも昔話を手がかりに人間心理の深層に迫る試みであり、また、一方は効用を説き、他は人と文化の原質的なものへと眼を向けさせている。私どもは、これらの著書を手にして、「物語の意味」を改めて考え直す機会を持つことになろう。

\* 河合隼雄「昔話の深層」福音館書店一九七七・一〇

(本田和子)



# 保育の体験と思索

## ——子どもの世界の探究——(十四)

津 守 真

夏休みを終わって、久しぶりに幼稚園で会う子どもたちを見ると、一段と成長したと思うことが多い。ずっと幼稚園に来つづけていたら、こんな成長を見せたのだろうかと思うこともある。夏休みを終えて集まってきた子どもたちの、落着きと自信と意欲にふれるとき、休みの間にこの子たちの生活に何が起っていたのだろうかと思う。

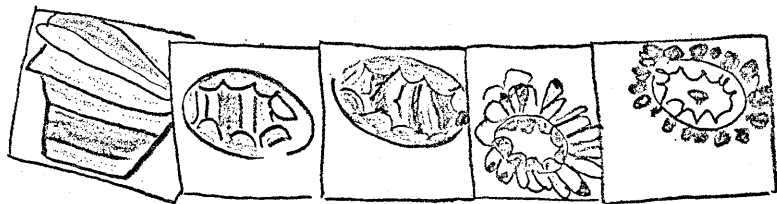
### 夏休みの意味

このことを私に考えさせてくれたAの事例について、はじめに述べたい。

Aは、四歳から幼稚園にいきはじめてきた子どもであるが、最初か

ら元気に幼稚園にゆき、よく遊び、時には友だちと張り切って遊んでおり、この子どもなりに幼稚園をたのしんでいた。それでも最初の集団生活で、緊張していたのだからと思う。夏休みになると、二、三日は、ぐでぐでと、本気に遊ぶこともなく過していた。そして、ある日画いたのが写真1の絵である。ひきつづいて、約二週間の間に、この子どもは同様のテーマの画を約四十枚かく。

写真1は、五枚の画から成る。Aはこれを描いて後、自分でのりで貼った。シリーズを全体としてみると、中心をもった渦巻の回転がつけられる過程を見ることができよう。第一枚目は、中心のない、部分層の積み重ねである。濃淡の異なるはだ色と青と赤より成る。二枚目、三枚目となるにつれて、次第に内部が分化し、



▲写真 1

4歳10か月女児

四枚目で外方向う青色の足が出て、五枚目で赤い丸の中心と、外側をとりまいて回転する緑色の丸が描かれ、全体が中心によって統合されたものとなる。

このような描画は、描き手の心の内的精神の状態をあらわすものであると私は見る。その詳細は、ここでは説明を省略するが、この子どもは、過去においても、もつれた糸玉のような混沌とした心の状態から、中心をもった渦巻の統合が生れるまでの過程を体験し、これを一連の描画で表現することをしている。今回はそのような過程の認識の第二の周期である。

幼稚園の最初の学期の生活は、子どもにとって楽しいものであったにしても、のりこえなければならぬことや戸惑いも多くあり、緊張の中

に、整理もつかないままに過ぎてきたことであろう。そして、夏休みに入って、社会生活から解放され、自分のペースの生活を回復するにあたって、このような画を描いたことは、大へん面白いことであると思う。

子どもは、混沌から中心をもった統合に至る過程を——それはかつて長い月日をかけて体験したものであったが——ここで一瞬の間に再現した。それは、夏までの生活を自分自身でもう一度考え直し、位置づけ、新たな方向へと向け直す子どもなりの作業ではなかったらうか。

子どもは言語や文字を順序よく書きつらねて自分自身を表現することをしない。むしろ、そのときに駆使し得る方法、画を描くことによって、自分のとらえたところを表現する。子どもがそれをどれだけ意識的に行っているかは疑問である。しかし、過去・現在・未来を子どもなりのやり方でとらえながら生きていて、それを何かの方法で表現するということはできよう。

Aは自分でこの五枚の画を貼りつなげて、終ったらさっと立去って、遊びはじめた。私はこの画を見るたびに、何か不思議な感に打たれる。

Aはこの後、約二週間にわたって、中心をもった渦巻のテーマの画を約四十枚描く。それは、ひとたび自分が発見した、いわば

自分自身の「哲学」を、自分で何度もたしかめているかのようである。ここでは、その中から二枚だけ、例を示しておくにとどめる。(写真2、写真3)この時期からずっと後に、Aには、同じテーマの描画表現の第三周期、第四周期があるのであるが、それについては後にふれる機会があるかもしれない。

このAの例にみるように、夏休みという、学校・社会生活から解放されたとき、子どもは過去を考え直し、反省し、とらえ直して、自分らしさをとりもどすのであると思う。夏休みが終ると、子どもは一步前進し、成長したようにみえるというのは、単に海や山に行つてふだんとは違った経験をしたというだけではなく、子どもなりに自分自身をとりもどす精神作業をしていたからでは



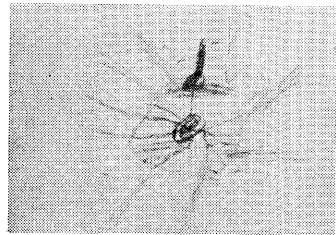
▲写真 2

「くじゃく」—中心をもった渦巻の一例

ないだろうか。そのやりかたや内容は、もちろん、子どもによつてまちまちであつて、Aの例は、ただひとつの例にすぎない。

夏休みが終つて、久しぶりに出てきた子どもたちは、いつものように無言で私にとびついてくる。あるいは、親しげに近寄つてきて話しかける。そして、めいめいに遊びはじめます。私は同じようにふれながら、何か一步成長したように感じる。いったい、久しく来ない間に、この子たちの中に何が起つたのだろうかと思ひに思ひつつ、立止つて見る。

夏休みと、幼稚園・学校のあるふだんの時とを対比してみると、それはいろいろの点で異質な時空間である。一方は、毎日一定の時間に出かけていかねばならず、いろいろの子どもやおとな



▲写真 3

中心をもった渦巻の一例

に出会う緊張があり、それがどんなに自由に遊べる場所であつたとしても、相当の社会的要請を避けることはできない。

まして、多くの子どもたちにとって、毎日、幼稚園や学校にゆくことは、肉体的にも精神的にも相当の精神的負担であるはずである。幼児期を過ぎたずっと後年になって、Yは、「学校って、考えるひまがないんだよ」という。

それに対して、休みの期間は、子どもは自分で考えることができる。自分で思うように時間を使うことができる。休みにはいるときに、子どもは、幼稚園・学校の社会生活とは別の世界に生きるのである。

このような異質の世界の交代は、人間の生活にかならずある。もっと短い周期でいえば、一日の中でも、社会生活に過す部分と、家庭で過す自分の生活とある。そして、もっと生活の根底には、覚醒の時間と睡眠の時間との交代がある。

眠る時に、人は覚醒時とは別の世界にはいり、夢の中での精神生活があり、目覚めるときには、前日とは違った気持で新たな朝を迎える。ひと晩眠ったから、前の日に逆もどりしてしまったというようなことはだれもいわないであろう。むしろ、ひと晩よく眠って、いい考えが浮んだとか、また新しくやる気になったとかいう。覚醒時とは別の世界での生活を過すことが、いわば前日の

できごとの整理をしてくれて、新たな方向を見出させてくれる力を生み出しているともいえる。

夏休みのようなまとまった休みの期間は、睡眠の時にも比せられると思う。その間に人は何もしていないのではない。ふだんとは別のことをし、ふだんの生活の中で負っていることを考え直し自分らしい生活をし、そして、休みが終わったときに、前とは違った人間となって幼稚園や学校に出てくるのである。

夏休みには、こうした異質な世界の交代という意味がある。これは夏休みとは限らない。一年の中に何回かある長期の休みの期間は、成長期の長年月を学校で過すようになった現代の子どもたちにとって、重要な意味をもつものである。ことに、幼児期に、幼稚園という社会生活が分化するようになったのは、ごく最近のことである点も、なお考慮すべきことである。異質な別の世界は、何れかが、何れかのためにあるというものではない。両者があって、ひとつの人間の生活となるのである。

私がここに記してきた附属幼稚園の子どもたちは、幼稚園の中でも、ずいぶん分らしく振舞い、遊ぶことができている子どもたちであると思う。それでもなお、はじめて入園した子どもにとつては、緊張した社会生活のようである。四歳児の母親は、夏休み

の間の感想として、次のように記している。

U「今年四月に入園して三か月、新しい環境にとまどいながら、毎日少しずつ慣れていったようでした。でも、お友だちと意志の疎通を欠いたり、自分自身を思うように出せなかったりで、そんなものがストレスとしてたまったのでしょうか、何となく体の調子を狂わせてしまった一学期でした。そして迎えた夏休みは、Uにとって大変貴重なものだったと思います。夏休みになってすぐ発熱しましたが、後半は、幼稚園生活をはなれて、近所のお友だちと思う存分あそべました」

幼稚園の生活だけ見ていると、楽しそうに適應しているようにみえても、どんな子どもも、はじめての社会生活による緊張があるのだということがわかる。

夏休みは、しばしば、母親たちには、たえず子どもにつきまといられると言つて嫌われる。しかしまた、多くの母親たちが、本能的に、夏休みを、子どもたちと普段とは違った落ち着いたつき合いをするのできる時としてとらえていることも事実である。

四歳児のある母親は次のように述べているが、この母親の見方

に感心させられると共に、これはかならずしも特殊例ではなく、多くの母親が経験しているところであろうと思う。

I「二か月の夏休みは、日頃時間に追われる生活から解放され、一日一日を充実した時間として見直させてくれる絶好の機会だと思いました。今年の我家の夏休みは、父親の仕事の都合と天候とのバランスがとれず、海へ山へという華やかなことはありませんでしたが、十分に子どもとの会話と、肌の触れ合いができたことは、大きな収穫だったと思います。お友だちと一緒に紙芝居を作り、お兄ちゃまの工作におつき合いして、絵の具で思いっきり絵をかかせたり、日頃はのんびりときあえない私も、本当にのんびり接することのできた有意義な日々でした。こんなあたりまえな夏休みがあってもいいと思いました」

夏休みに、別の社会生活のプログラムに追いかけられたら、子どもはまた自分の生活をもてなくなってしまう。母親との間のゆっくりとしたつき合いの中で、幼児は自分自身の生活を最もよく持つことができるのが普通であろう。母親にとつても、夏休みは子どもと十分につき合つて、共に考えることのできる機会である。

## 二期期の子どもたち

X月二〇日

朝から昼近くまで、男児Kと男児Tは二人で砂場で遊んでいる。容器に砂をいれてアイスクリームと言ったり、砂山をつんで穴をあけたり、互いの足を砂で埋めたり、その他、記述するのが困難なような単純なことをして、二人で落ち着いて遊んでいる。

Kがこうしてだれかと一緒に遊ぶのを見るのは、私には珍らしい。二人で一緒に、めいめいがそれぞれの砂遊びをしていて、ときどき一緒にになり、しかも二人は相呼応して遊んでいる。明らかに、KとTは、二人で「一緒に」遊んでいることを楽しんでいゝ。私は傍にいて、砂場に入ってゆくことははばかられた。

私が見てきた範囲では、Kは子どもと一緒にの場面では、じきに相手の嫌がることをしたりして、素直に他人と共に活動を継続させることが困難なことが多かった。たとえば、三歳の時の五月の記録では（本誌七十六巻二号、五十五頁参照）、Kはおうちごっこに入りたくてそのそばにいるが、皿やコップを渡されても、「なんだ、こんなの」と言つて放り投げたりすることが多く、おうち

ごっこのやりとりの中に入りこむことができない。

他の人と互いに応答しながらつきあうことができないということは、これを個人に即した内的観点から見るとすれば、他人と応答する自分自身を受け容れることができないことである。

おとなの場合には、グループの対立や主義信条の対立、あるいは、自分を優位に保つことや、すべてを自分の思い通りに完全にしようとする観念等々が基礎にあつて、そのために、他人との対等円滑な交流を楽しむことができないというようなことになる。そこには、他人との応答を受けいれることのできない心的過程があり、それは普通には意識されにくい。

幼児の場合には、おとなの心を分断する要因とは内容を異にするけれども、他人と応答して遊ぶことができないというのは、そうすることを受けいれることができないでいる自分自身があるからであろう。たとえば、これをKのおうちごっこの事例に即していうならば、差出されたものを受けとる自分自身を、Kは受けいれることができない。それはKの意地や自尊心が許さない——これは推察であるけれども——。

子どもが何かをおとなに差出したとき、おとなが、「なんだ、こんなの」という風に、素直に受けとってくれなかったら、子どももまた、相手の差出したものを素直に受けとらないというダイ

ナミックスが働くだろう。差出したもののみでなく、子どもがしたことを、おとなの規準に合わない故に、おとなが受けいれることができないときには、全存在が否定されることになる。そのようなときには、子どももまた、他人の存在自体を否定するようになるかもしれない。

これはしばしば、知恵おくれの子どもなどに一層起りやすいことである。知恵おくれの子どもは、その子なりに精一杯にしたことでも、おとなから快く受けいられない可能性が多い。同じ程度に知恵がおくれている子どもの場合でも、そのすることを、親が快く見てやれる場合には、子どもは他人の存在を快く受けいれ、他人とつき合うことが容易になるだろう。

素直に受けとることができるようになるのは、してほしいことをやってくれる誰かを得られることであるということを、E・エリックソンは、英語の語彙の用法から、乳児と母親との関係に言及して論じている。

「得る (to get) とは、受取ることであり、与えられるものを受約することである。これは人が人生で学ぶ最初の社会的状態である。それは単純なことのように思えるが、実際はそれほど単純なことではない。……母親がまず与える方法を発達させ、それを調整する。それに従って乳児が彼の受取る方法を発達させ、協応

させる。……乳児と母親の双方は、口と乳首という焦点的な器官を通してだけでなく、身体全体で、温情と相互性をくつろいで示し合い、楽しむ」(E・エリックソン、仁科弥生訳、幼児期と社会、みすず書房 昭52 P 89~90)

さらに、エリックソンは、受けること―得ることについて、get の用法をめぐって次のようにいう。

「このようにして発達した相互にくつろぎあう関係こそは、友好的な他者との初めての出会いにとって、もっとも重要なものである。このように与えられるものを得て、自分がして欲しいと願うことを自分のために誰かにしてもらうことを学ぶうちに、乳児もまた与える人になるために必要な自我の基礎を発達させるということができる」(E・エリックソン 前掲書 P 90)

ここで翻訳されていることを、英語の get に即して見ると、もっと明瞭になる。第一に、同じ get が、受けるという意味をもつと共に、第二にそれは得るという意味にもなり、第三にそれは与え手となるという意味にもなる。

1. to get what is given (与えられたものを受けること)
  2. to get somebody to do for him (してくれる人を得ること)
  3. to get to be a giver (与え手となること)
- 与え手となることができるのは、与えられる経験と密接な関係



があることを、これらのことは示している。

さて、Kは以前には、友だちから差出されたものを、素直に受けとることができなかったのであるが、四歳の夏休みをこえた時に、他の子どもと相呼応して遊ぶこと——相手から受け、相手に与える相互性を楽しむようになった。それは、K自身が、おとなから受けいられ、関心や愛情を得ることから生れてきたものといえよう。さらにその基礎には、十分に遊ぶことによって、自分のすることを自分で受けいられるようになったことによるものといえよう。

夏休みの感想として、Kの母親は次のように書いている。「Kが何か新しいことに直面した時、目を輝やかし、胸をふくらませ真剣に向ってゆく姿をたのしく思いました。幼稚園での一年半の生活が、Kを通じて理解できるような気がし、先生の地道な努力に感謝を新たにいたしました」Kの母親は、Kのすることに意味を見出すようになってきている。Kに向う母親の眼は肯定的で温いものになっていることが文面から感じとられる。

そして幼稚園の先生に対する感謝を記しているのは、Kの母親のみであることを考えると、もちろん、幼稚園の先生の力も大

きいが、このことを感謝できるようになった母親の力も大きいと思う。この母と子の夏休みの様子が想像できるような気がする。

二期期になって、急に成長したように思われるのは、Kにどまらない。多くの子どもについて、成長を感じさせられる。愛育の知恵おくれの子どもについても同様である。それぞれの子どもが、自分の負っていた問題から脱皮して、面白くて張りのある生活を求めつつあるように思われる。新宿御苑に遠足にいったとき、何人もの子どもが、同じ場所に遠足にきていた普通の幼稚園の子どもたちの輪の中にはいらたがる。以前には見られなかった光景である。

(つづく)



★講演★

子どもをみて考える

——股関節脱臼のことから——

(一九七七年九月六日に幼児教育現  
職研究会で行なわれた講演より)

坂口 亮

ヒポクラテス以来の病気

はじめまして。ただいま、御紹介頂きま  
した坂口でございます。医者の方でござい  
ます。子どもの病気を直しているの  
で、その子どもをうまく扱える成績もい  
い訳で、だんだん、保育やなんかにもある  
意味で共通することがあるのではないかと  
思ったりしております。

結論などというのは無いのですが、問題  
提起のようなことでお話をし、それで皆さ  
んにも、実際、現場で御経験の方も多いと  
思いますので、御意見を伺わせて頂いたり  
すれば、今日私を呼んで下さった意味が出  
てくると思います。

さて股関節脱臼というのが、私にひとつ  
の考え方の転機を与えてくれました。おお  
げさに言いますと、世の中の見方が変わった  
というのか、股関節脱臼で仕事をしなが

ら、それによって、すっかり違う見方をす  
るようになりました。

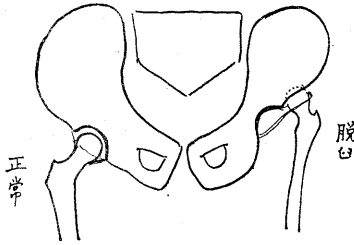
股関節脱臼というのは、ヒポクラテスの  
時の、二千年も前から知られている病氣  
で、はずれていても別に痛みはないんです  
が、少くとも、妙な歩き方をすることにな  
ります。

正常なら骨盤の窪みの所に、丸い大腿骨  
頭がはまっていて、きれいに動いているの  
ですが、はずれていると、支えが無いので

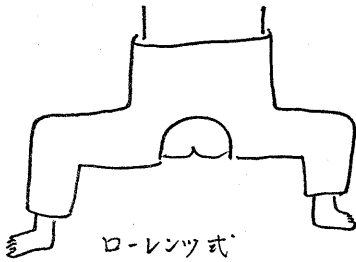
〔図1参照〕体重をかけるごとに上下動して、腰を振って歩くとかいうようなことで、それが昔から医者の中の悩みの種になりました。

まだ本当の原因はわかっていないのですが、女の方が、五人か六人に男一人というような率が多いんです。で、年頃のきれいな御嬢さんなどが、やはりそんな歩き方をすると、なんとかならないものかと、昔からいろいろな試みがされました。

結局、考えることと言いますと、皆、同



▲ 図 1



▲ 図 2

じ訳で、はめることになります。ところが、もともと、生まれつきということではずれている人にとっては、はずれていることの方が自然で、はめてもすぐ出てしまう。出てしまつては治療にならないからと言うので、ギプスを巻く訳です。

それがちょうど、股を開いた形が、一はずれにくいのです。股をすばめると、骨頭は後ろへ逃げてしまい、足をおろすと、上方へ逃げてしまう。いつも足を曲げて開いた形が一番良いものですから、両足をギ

プスで、がんじがらめにしまして、おしっこ、うんちの穴だけあけておきます。

〔図2参照〕この方法を発明したの

は、一八九五年、ウィーンのローレンツという人なんです。この歴史を見ますと、種々、考えさせられることをもっています。

それまでに、いろいろな人が試み、試みては駄目で挫折した、その脱臼に対し、ローレンツが一応成功したのです。

股を九〇度を開いた形でギプスを巻いて（蛙の足のような形なので、フロッグ・レッグ・ポジションなことを言います）それで半年も固めておいて、次にギプスを取りますと、飛行機みたいにカチンカチンになっていて、動かすと痛がる。足を動かしませんから、はずれません。はずれはしないけれども、これでは使いものにならないということ、マッサージに通い、お風呂に入れたりして、だんだんやわらかくして、それで治療が完成したということなんです。

整復と固定と後療法、この三つが三大原則として必要なことで、これにより、脱臼

がはまるし、直るといふことで、この人は画期的なことをしたと言つて、世界から注目を受けたんですね。

それまでも、はめるだけならば、なんとかできたんですが、すぐはずれてしまつて駄目でした。なかには、業を煮やして、手術してはめればよいといふことで、手術しました。

しかし、今のようによい抗生物質がありませんので、すぐバイ菌が付いて化膿してしまい、それで、かなり深い所ですので全身、敗血症になり、生命を落してしまいました。

あるいは局所だけでも、うんだ後、固まりますから、股関節が動かなくなつてしまふんですね。ですから、まがつたまま固まつたりしました。

ここまでは、ことごとく挫折の歴史で、ローレンツがはめて固めたら治るんだと言いますと、ついにヒポクラテス以来、不治

といわれたこの脱臼が直るんだといふことで、ローレンツは世界の注目を受けて、人は皆、ウィーンへ、ウィーンへと習いに行つた訳です。

整形外科というのは、ある意味で、ここから始まつたようなものです。どうも外科の方は、手術が専門で、すぐに切つたりします。しかし整形外科といふのは必ずしも切らずに、外から手ではめて、固めて、その後、柔らかくするといふような、メスで治すのではない。だから、やはり、外科の一部ではなく、整形外科は独立して、そういうことをやるべきではないか。関節なんかに関しては、後の機能を良くすることを考えながら、そうすべきではないか。ドイツでは、それをもとにして整形外科が独立しました。余談になりますけれども。

皆、ウィーンに集まりますと、このローレンツ先生が、子どもを集めて来まして、ポンとはめる。力でもつてすると、はめる

時、ポンといい音がするんです。整復音といつて、その音がありますと、その子どもが脱臼が遂に治つたといふことで、勝利の音のように街々に鳴り響いたなんてことが書いてあります。

ローレンツ先生、世界中の人が来ますし、自身もあちこち回つて講演して歩き、実技をやつてみせまして、ずいぶんお金儲けができたそうです。そしてこのようにして、これから今世紀一九〇〇年、一九一〇年代には、子どもたちは、十歳か十五歳位になつてゐる訳ですが、成績は意外によくなかつた。年頃になる頃、猛烈に痛みが起つて来たり、痛いたために、動きが悪くなる。跛びつこをひかなくちゃ、歩けないことになります。

この方法でもまだ駄目なんだといふ絶望的な気持ちが出てきたもの、といつて、これに替わるものがないんですね。はず

れたものは、やはりはめて、固めなければ治らない訳です。なんとかギプスに替わるものがないんだらうか、体の出し入れができるように、機械にしておくとか、(ギプスは巻いたままで出し入れができません) なんとか皆、工夫をした訳です。

一方でまた、早く脱臼を見つけて治療した方がいいんじゃないかということになりました。脱臼というのは、大ていの子どもは、痛くも痒くもないので、歩き始めないとわからないんですね。普通、お誕生過ぎると、一歳三・四か月頃までには歩き始めますが、それを過ぎてもまだ歩き始めなく、「どうも遅いな」なんて言っているうちに、歩き始める。しかし、肩を振って歩くとかで、やっと気がつくとか、どうしても一歳をかなり過ぎてしまいます。

昭和三〇年頃から保健所などが力をいれて、三か月、四か月の検診で脱臼の赤ちゃんをどんどん見つけるようになりました。

しかし脱臼があると早くはめなくちゃいけないということ、結局、整復と固定の方法に来るんですね。他に手がないんです。小さな赤ん坊の骨の柔らかいうちにこれをやりますと、骨の軟骨の頭に傷がつき、後のみじめさといったらないんです。

れっきとした大学の一流の先生にみてもらい、ギプスで固めて、お母さんは我が子の幸福を願って、毎日毎日、マッサージに通いました。その結果が良ければいいんですが、いじめられた後の傷跡は、一生残るんですね。特に成長の芽を摘み取られたようなものでは、だんだんそれが差になって現われ、片方はスクスク伸びているのに、傷ついた跡は、いつまでも成長が妨げられます。

脱臼は治しちゃったんだから、治っているんですが、それがいかにも治しましたというふうな、みにくい変形を残しています。足の成長が悪いので、脱臼は治ってい

るのに、<sup>びつこ</sup>跛をひくということもあり、親もまあ、あれだけ苦労したのだからしょうがないと、いつの間にか、あきらめの境地に達し、それから、努力したことに對する満足感で過ぎて来たんですね。

医者の方も、決して怠けていた訳ではないんですが、他に手が無いんですから、どうにかならないかと思いつながら、これもしようがないということで、結局、約六、七十年になりますかねえ。これで過ぎていたんです。

### チェコのおみやげ

一九五七年(昭和三十二年)にパブリックという人が、チェコの人なんですけど、非常にささやかな論文をドイツ語で出しました。自国語ではだいたい前に出してたようなんですがね。やはり大国主義といいますか、アメリカやなんかでは、チェコの人

は、知られていないんです。そういう意味で無名人だったんですが、ドイツ語で出したので、少しドイツ語圏に普及しました。

その論文によると、何もこちらから、はめなくてもいいんだというのです。赤ん坊がこうやって、〔図3参照〕近頃、街を歩いていきますから御存知と思いますが、肩からズボン釣りみたいに、足を釣っとくだけでいいんです。足のところが、ちょうど乗馬の鑑あなまのようですから、これを鑑、ドイツ語でビューゲル、吊る部分が革紐でできていましたので、リーメン。リーメンビューゲルと言いまして、「革紐鑑法」です。これでただ釣っとくだけなんです。ええ。そうしますと、伸ばすことだけができなくて、あとは自由に動かせるんです。そうすると、自然に動かしているうちに、自然にはまってしまうんです。こういう論文を出したんですけれども、世界の人があまり本

当にしないんです。ええ。

私たちが東大の医局に入った頃は、まだ昔の教育をちょっと受けまして。先輩連中に、はめ方、次にはギプスの巻き方を教わる訳です。時には、ギプスを巻いて、中を見ますと、はずれている。折角、巻いた後、レントゲンを撮ってみると、はずれている。そうすると先輩に、すぐに直れまして。ええ。

「おまえのギプスはなんだ、すぐ巻き直せ」と。そこでギプスを切って、また巻き直します。赤ん坊のことなんか考えていないのです。いつもレントゲンの写真がいいかどうか、そればかり考えていた訳です。

その位嚴重にしても、はずれてしまうことがあるのに、こんな紐でもって治るとなったら、こんな馬鹿な話はない訳です。ね。

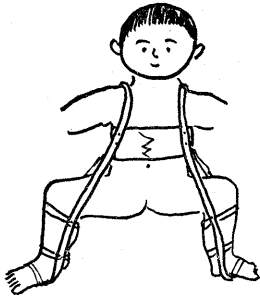
私たちの先輩で、当時、東大の講師で、今、

長崎の教授をしておられる鈴木良平先生という方が、モスクワで世界ユニバーシヤードが開かれた時、体協の方からモスクワに行かれました。そして、帰りにチェコに寄りまして、「こういうの見たことないだろう」ということで、この紐をもらって来られたんです。こういうお土産なら荷物にならなくていいんです。ええ。

そのお土産を、ペブリック先生の論文と一緒に、私たちの東大の医局に紹介されました。ところが、三木先生という偉い先生、何もその先生個人を指す訳でなく、そのジェネレーションの偉い先生、教育者の立場にある先生方には、新しい事実が理解できないんです。そんな馬鹿なということ、それで、折角紹介した鈴木先生に怒られました。ええ。「君は横文字にまどわされているんだ。横文字の論文をみると、なんでもいいようにみえてしまうんだ」と言うのです。

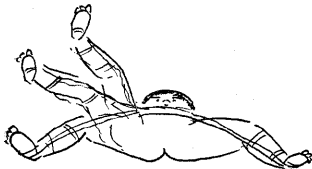
「こんなインチキなものが流行っちゃ困る」といわんばかりの教授の不評を買ってしらけた空気がなりました。その時、二つの疑問点が出ました。ひとつは、こんな物をつけておいても、はまるはずはないんじゃないかという疑問です。今まで一生懸命、はめる技術の工夫に努力して来たのですからねえ。

次の疑問は、一步譲って、こんなもの動かしているうちに、はまる可能性はひとつ認めてやろう。ただ次に、折角はまっ



リーメン ヒューゲル  
(革紐) (あがみ)

▲ 図 3



↑ 整復  
脚は動かさない、  
ひいて日よ

▲ 図 4

も、子どもが脚を動かせませんから、脚をすぼめた時に、脱臼ははずれることになりません。また開くとはまるかもしれない。そうすると、骨頭が出たり入ったりして、結局治らずじまいになってしまわないかということ。その疑問が非常に大きかった訳です。それが恐いから、ギプスでぎゅつとしていた訳です。

鈴木良平先生、そんな環境でしたが、東大で一生懸命、治療に当り、結構うまくいけることを発見しました。学へにも発表し

たりして、だんだん日本全国に普及していったのです。

その後、私もまあ、やらせてもらったようなものなんですけれども、私としては、そういう歴史的なことを知って、いまして、それから、ある意味で助かったと思うのは、これがいろいろなことを教えてくれる画期的なものであったことです。

私が、それまでのギプスでがんじがらめにして治療することに對する居直った気持ち。あんなこととして脱臼の治療をする位なら、はずれたままの方がいいんじゃないかという気持ち。あれだけは、絶対にいけないと思っていたので、新しい考え方にすぐ入って行きました。

たとえ昔の強引な治療をしてでも、治さなければいけないと思っていれば、非常に入りにくかったと思います。幸いなことに私は前の方法の悪魔的な感じが、とてもいやだったので、これが非常に幸いした訳で

す。

それで非常に面白いのは、脱臼がはまっても、子どもは脚をすぼめて、またはずれてしまうのではないかという、いかにも最もらしい疑問に対する答えです。

事實は、さにあらずで、子どもを實際に見てみると、脱臼の時は、股の開きが悪い。それに対し、黙って、リーメンビュールをつけていりゃいい。そうしますと、二、三日するうちに、(早い人はその晩なんでしょう)一週間位たつて来てもらいますと、ちゃんとはまっている。股が完全に開いている。

それから、お母さんによく聞いてみますと、一晩か二晩たった時に、一度ギヤーンなんて泣いたことがあり、それから、こう股が急に開きましたなどといっています。

面白いことに、私たちの所に来る時は、その開いた足をすぼめないのです。実にもう、きちんとおとなしくしたまんまで、で、

いい方の足は、じっとしていませんから、どンドン動かすんです。片側だけの脱臼の場合は、左右の差が非常に印象的です。

〔図4参照〕

#### 自分で治す方

ということは、子どもがどんなに自分で治そうという力をもっているか、一度はまってしまったら、はずれないようにしている訳です。そうしますと、根本原理が逆になってきます。こっちで一生懸命、はずすまいとして固定してしまっても、子どもはギプスの中で必死になつてはずそうとします。だから一層、固定を嚴重になくちゃならない。子どもは油断もすきもあつたものじゃない。ちょっとゆるめたらはずすんだという考えと、ぼかーんとやっておいて、はずれるんなら、はずれてもいいんだというふうに構えていると、むしろ子ども

の方が自然にはまって治っていくという事実は、真に考えさせられることです。え。

はずれるということを考えてみると、それは非常に理屈があることなんです。これは少し学問的になりますが、はまるということは、このきれいな窪みに、骨頭がはまることで、中に少し邪魔物がありますと、こわいんですね。平滑な丸い窪みに骨頭が入っていれば、治る訳ですけれども。変な邪魔物がありますと、骨頭の軟骨がぎゅっと押しつけられて、この骨頭の軟骨のほうは、すぐへこんでしまつて、いびつになります。つまり、ギプスで固定されると、骨頭を傷つける最大の原因ともなります。はまる——修復されたということは、非常に嬉しいことであると同時に、一方において、そのような危険と同居してはいないかという心配を伴う訳です。

ですから、その場合、私たちとしては、は



ずれるものならはずれてくれたらいいと。

これは次の手を考えればいいんですからねえ。無理矢理固定して、後生大事に、はずれないようにしておいて、一生取り返しがつかない傷を作ってしまったら、こりゃ大変だということです。

ですから、このリーメンビューゲルというのは、子どもがいやなら、はまりませんし、もしはまっても本当にいいはまり方であれば、また動かしてはまずでしようし。いいはまり方だからこそ、びたっと、はずれないように、動かさなくしてるんです。

同じように、もしもギブスに準じたような機械を使わなくてはいけない時でも、がっちり固定してしまうことは、非常にこわいことで、いつも、ゆとりをもって、中でガタガタ動かせるようにしとくんですね。原則として子どもは、はまったらはずさないんだという、ひとつの事実を得ら

れていますから。

そうしますと、例えば、私がかまあ、口でこそ言いませんけど苦しかったら、はずしてしまってもいいんだよという構えでやりますと、おもしろいことにはずさないんです。

それを私たちの仲間の、整形外科の医者が集まりますと、皆わからないんですねえ。そんなはずはないと言ってねえ。折角、い所まで行ったと思うと、また、つまらない所で、子どもを疑って手を加えるんですねえ。そういう人が非常に多くてはなはだ心外なんです。

それで、私がそう言いますと、すぐ、また始まったとかいうようなことで相手にされないんですがねえ。しかし、事実はそうで、はずれるなら、はずれてもいいということをやっていますと、子どもはそんなにはずさない。ただし、いつでも、もしはずれたら次の手という後続の手がありますか

らねえ。それがないと、とてもこわいです。それから、やはり原則として子どもはそうはずさないんだという事実が何といっても大きな強味です。

私も、悪魔的とかなんとか、以前の治療法をさんさん悪く言いますが、考えてみますと、我々の先輩連中も、決して悪魔のような考えは毛頭なくて、なんとかして子どもを治してやりたい、放っとけば、将来、跛をひくであろう。年頃の娘さんなんかを想像して、ここで頑張らなければと、心を鬼にして、一生懸命やり、お母さんも医者にくつついて、我が子可愛さのあまり一生懸命やっていたんです。それが皆、あだになつてしまった。なんとも、やるせないと言いますか、切ないと言いますか、そういう気持ち起させる訳です。

我々非常に頼りない存在で、本当にいい  
と思つてやっていることが、一生懸命やっ  
ている時には、ある意味において一番氣を  
つけなくてはいけない。いつでもニヒルで  
は困る訳ですけれども、洗い直してみたり  
しながら、やはりいつでも反対の自分とい  
うものを作つて、やはりこれでいいんだ間  
違いないんだと確かめていかななくてはい  
けない。

それから悪そうな時は、やつぱり素直に  
どンドン変えていく方がいいですねえ。い  
つでも頑固に、固執するんじゃないで、そ  
れが、いわゆるフレキシブルというやつ  
だと思つてですねえ。

自説を曲げないというんじゃないで、や  
はりそれでいいと思つたことは、それだけ  
のことを練つた上でのことで、その上で良  
ければ、進んで行つても間違いが少なくてす  
むということではないでしょうか。

それからその努力のことですが、皆さん

は、特に子どもを扱つておられますし、私  
たちも患者、子どもを扱っている訳ですし、  
本当は政治家は、国民全部を扱っている訳  
ですから、政治家に頑張つてもらわなくち  
や困るんですけれども、自分だけが善意か  
ら努力して、人を巻き添えにしていけないか  
どうかですねえ。

自分だけが苦しい努力をするならいいん  
ですけれど、それを押し付けて、その結果  
が悪かつた時の責任をどうするかというこ  
と。それを、努力したんだから、もつて免  
すべきだというのは、逃げであったり、甘  
えであつたりで、それじゃいつまでたつて  
も良くならないと思つてですねえ。

まあ、その辺の所の、最後の二、三行位  
が私の申しあげたい所です。

(整肢療護園)



幼児の教育 第七十七巻第二号

二月号 ◎ 定価二二〇円

昭和五十三年一月二十五日 印刷

昭和五十三年二月一日 発行

112 東京都文京区大塚二ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

編集兼 津 守 真  
発行者

112 東京都文京区大塚二ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

発行所 日本幼稚園協会

108 東京都港区三田五ノ一二ノ一

印刷所 図書印刷株式会社

101 東京都千代田区神田小川町三ノ一

発売所 株式会社 フレーベル館

振替口座東京九一―九六四〇番

◎ 本誌御購読についての御注文は発売  
所 フレーベル館にお願いいたします

※万一製品不良本がございましたら、おとりかえいたします。

主催：日本幼稚園協会・みどり会

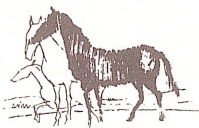
## 第6回幼児教育海外視察旅行のおしらせ

1978年3月23日～3月31日（9日間）

—— アメリカ西海岸・メキシコ市を訪ねて ——

青い空とオレンジのカリフォルニアと太陽の国メキシコを9日間というコンパクトな日程で訪ねます。又サンフランシスコとメキシコ市で幼稚園、保育所等を視察します。費用も若い皆様が参加しやすいように考慮いたしております。

●企画：お茶の水女子大学教授 中村英勝  
同 附属幼稚園園長 山村きよ  
みどり会会長



●協力：フレーベル館

●日程：東京～サンフランシスコ（2泊）～メキシコシティ（3泊）～ロサンゼルス（2泊）～東京

●募集人員：40名（先着順に受け付けさせていただきます）

●旅行経費：¥325,000（ローンによるお支払いもできます）

●旅行経費に含まれるもの：①航空運賃 ①一級クラスホテルツインルーム ③全朝食、2回の昼食  
④視察経費（通訳、バス代）⑤各都市の市内観光（ガイド、バス代）⑥空港税 ⑦20kgまでの手荷物運搬料金 ⑧団体行動中のチップサービス料 ⑨ツアエスコート経費

●ご注意：旅行条件等の詳細はパンフレットをご請求下さい。

### ●ご案内

日本幼稚園協会・みどり会主催の海外幼児教育視察研修旅行も第6回目を迎えることになりました。

今回は待望のメキシコシティを訪問し、併わせて今までに見学してきた中（サンフランシスコ・ロサンゼルス）で参加者が感激した場所を再度訪問したいと考えて、次のような計画をいたしました。

回を重ねるたびに交友関係もひろがり、同じお仕事に励む中での共通理解や喜びの文通が始ったり「思い出話の会合をもった」等のおたよりをいただくたびに主催者側としては心から喜んで居ります。参加者の皆様のご協力で立派な資料も残されております。

今回もどうぞお仲間大ぜいをお誘いくださいませのご参加くださいますようお願い申し上げます。  
(山村きよ)

●詳細なパンフレットは：詳細なパンフレットを用意しております。ご希望の方は、はがきに住所、氏名、電話番号を明記のうえ山村宛ご送付願います。

●お問い合わせは：みどり会・会長 山村きよ

〒107 東京都港区北青山3-4-21-202号 電話 (03)408-2761

又は **池** 日本交通公社 国内 団体旅行新宿支店 海外（運輸大臣登録一般旅行業64号）

〒160 東京都新宿区西新宿1-18-8 スカイビル内

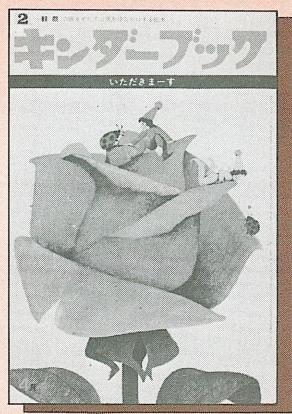
電話 (03) 346-0170 担当：冨田、大山

# 53年度 フレーベル館の 月刊7誌

“大きく、ゆたかな子どもに育てほしい”  
この願いが、たゆまぬ研究、新鮮な企画となり、キンダーブックの長い歴史を築いてきました。今年から『キンダーメルヘン』を創刊し、絵本の領域を広げるとともに、各誌内容をより充実させました。(価格はいずれも据え置きといたしました。)



情操をゆたかにし創造力をのびます  
**キンダーブック 1-情操**  
4月号 “はやく おおきく なあれ”  
●付録・こいのぼりの工作  
団体購読価 200円



観察の眼をそだて心情をゆたかにする  
**キンダーブック 2-観察**  
4月号 “いただきまーず”  
●付録・こいのぼりの工作  
団体購読価 200円



科学する心を育てて自然に親しませる  
**しぜん-キンダーブック 3**  
4月号 “たんぼぼ”  
●付録・こいのぼりの工作  
団体購読価 200円

## 創刊



幼児らしい夢をそだてる絵本  
**キンダーメルヘン**  
4月号 “くまのくつやさん”  
●付録・こいのぼりの工作  
団体購読価 200円

AB判・厚紙製本



幼児の美しい心を育てる  
**キンダーおはなしえほん**  
4月号 “どうのひっこし”  
●付録・こいのぼりの工作  
団体購読価 200円



保育をゆたかにする **保育専科**  
実践的保育専門誌  
4月号 “自由遊び”の楽しさおぼくし  
特集 ○新学期をうまく乗り切る方法  
定価 300円

園児をもつ母親のための専門誌  
**ホームキンダー**  
4月号 特集 しつけ・子育ての第2ステップ  
-家庭のルール 社会のルール-  
団体購読価 200円

くわしくは、フレーベル館代理店・支社・支店・営業所、または本社営業課(03)292-7781(代)にお問い合わせください。